第三章　教育・文化

第一節　学制の変遷

一　学制前の教育

教育の変遷を見ると、勝目文書に慶応年代諸郷に漢学教師を置いて、子弟に四書の素読を授け、これが教育の発端であるといっている。そのころは郷内の学識のある人の家に行って学問を習っていた。そこでは初登山、実語教、童子教、商売往来、庭訓往来などを習い、少し程度が高くなると、四書から五経を習った。いわゆる寺子屋であろう。恒吉では勝目政行などこのころの学者で、恒吉の行政に活動した人たちはたいていその門をくぐった。

明治元年三月から五月にかけての藩政改革で、開成所を造士館内に合併し、更に和学局を置き、館内を和学、漢学、洋学の三学局に分かった。和学局は後国学局とも言った（この三局鼎立は、明治四年正月本学校、小学校制の創始までつづいたのである）。

明治四年正月十日洋学局を廃し、その跡に本学校を建て、又他に小学第一校、小学第二校を建て、本学校管轄とした。

小学校諸生は定員四百名とし、城下士族の子弟八歳から十八歳までの間から募集し、内九十人はこれまでの洋学局の諸生を編入した。その後、小学校が増設され、四年四月には仮小学校を第三校とし、第四校も出来た。

小学校の外に城下諸郷に郷校が開設された。小学校は本学校所管の藩校であるが、郷校は当初士族共立の私学として創立され、その内から漸次藩校として番号を冠して本学校管轄に移ったもののようである。

外城でも郷校が創設されて、外城第一郷校は垂水に置かれた。明治二年十二月地頭高崎正風は垂水学校を設立した。そして学校の体裁が大体整って明治四年六月外城第一郷校の名を得た。第二郷校は指宿、第三郷校は入来、第四樋脇、その後続々と郷校が設立され、特に明治五年学制の発布以後、本県が従来の郷校を以て変則小学の制に代用されて以来、広く県内に普及したものである。これら郷校の順位は、本学校に出願の順序によって附せられたので、従来都城、加治木、宮之城等、士族の多い私領地等には旧藩時代から学館の設立があったが、

本学校に出願してその管轄に入るまでは郷校に列せられなかったのである。

明治四年十月、県の学制は本学校、小学校、郷校の一本建てになった。本学校は小学校、郷校を管轄する教育行政の中心機関であると共に、上級学校で、維新前の造士館の系統をひくものであった。和漢洋三学兼修の中等程度の学校で、生徒は中業生と呼んだ。

諸郷の郷校の指導監督には、小学監があたり、郷校の洋算教師等、人を得ない時は、本学校から三十日交代で派遣しまた郷校から本学校に入学させて、教師に必要な教育を施した。本学校は八年ごろ廃止されたらしく、教育行政は学務課に移り、学校の方は変則中学となったようである。小学校と郷校との関係は、系統関係はなく、小学校は最初から本学校直轄の藩校として設立され、郷校は各郷士族の共立で規模を備えてから本学校管轄に入った。文部省は明治四年七月設立された。

学制による郷校が出来る前は、子弟の勉強をしようとする者は、皆先生の自宅に行って、読書算術を学ぶくらいのものであった。寺子屋という類であろう。

坂元では、明治二年瀬ノ口の御仮屋あとに士族の二歳を訓練し読み書きを教える寺子屋的なものができた。先生は国分の伊集院十郎で、年米四石を支給され、別に田畑を借りて仕事は子弟が加勢をしていた。

二　学制公布以後

明治五年八月学制公布、九月小学教則が発布された。この制度は全国を八大学区とし、一大学区に三二中学区、一中学区に二一〇小学区をおき、小学校は尋常、村落、貧人、女子などの種別を設けた。また尋常小学を上等と下等に分け、下等小学校は六歳から九歳まで、上等小学は十歳から十三歳までとした。

しかし国内の事情からこれを全面的に実施することは不可能であったので、学制による正則の他に変則の小学校も認めた。本県は第五大学区に入り管内六中学区、千二百五十小学区に分かれた。小学校は従来の郷校を変則小学校にあてた。

明治四年十一月、都城県が置かれ、岩川、恒吉、月野はその管轄となる。五年四月から郷校が置かれ、岩川は第四郷校、恒吉は九月第二十一郷校を創設した。岩川小学校沿革の中で「明治四年七月、都城県第四郷校創立」とあるが都城県は四年十一月からであるので、明治五年

七月創立の誤りであろう。坂元出身の奴久妻与太郎（兼修と称す）に対する辞令に「小学生申付候事　壬申九月第拾九郷校」とあるが、第拾九郷校はどこであろうか。恒吉は二十一郷校で兼修は翌年恒吉へ転勤しているが、次の勝目文書と併せ考えると坂元にあったと思われる。一郷に二つの郷校があったのだろうか。

恒吉の郷校について「勝目文書」では

「明治五年九月、恒吉第二十一郷校（変則学校と称した）が出来てからは漢字、数学の教師を聘用し、生徒を募集し漸く学校設備が出来た。その年の十月には坂元にも同じような学校が出来た。このころは八、九歳から二十四、五歳までの者が入学したという。しかしこんなことは最初の一、二年のことで、その後は十四、五歳まで入学した。

明治六年一月、都城県廃止後、恒吉は第五十四郷校と称しやはり変則学校の名を残した。学級を初級、一級、二級、三級に区別し、教科書は三字経、大統歌から漸次博物、論説などに移っていった」と記している。

鮫島利雄氏の調査では「神牟礼小学」があったという。

奴久妻兼修教員辞令

「明治初年、恒吉大字坂元神牟礼に学校創立され、鹿児島城下塩屋神官佐藤大和守遺族神牟礼に来住、四一五六番地に学校を建つ、かや葺きであった。佐藤彦二、栄之助の兄弟が教授にあたった。神牟礼小学の金属製の印があったそうだ。佐藤氏宅を学校と呼んでいた。明治十年以前と思われるけれども、今の所廃校になった年月日は不明である。」

神牟礼小学についてはこれ以上記録がない。明治五年郷校創設のころ、末吉郷や志布志郷では分校をつくっているが、分校であったのか、独立校であったのか不明である。明治十四年、奴久妻兼修は神牟礼小学の助訓を命

ぜられている。

月野は明治五年、志布志郷校の外、分校十一創設とある中の分校に含まれていたかどうか不明である。

明治六年一月、都城県が廃止され、岩川、恒吉は鹿児島県に入り、月野は宮崎県に含まれる。このため郷校名が変り岩川は第五十二郷校、恒吉は第五十四郷校と改称された。

志布志町誌（宮崎県古公文書）によれば、志布志郷は当初小学の名称を小学区の番号で呼称していたが、小学開設後、村名や設置部落名で呼ぶよう明治八年三月、第十一番大区学区取締兼祠官から宮崎県参事宛伺いを出している。これによると第十三番小学を月野小学と呼ぶように申請している。明治七年、宮崎県小学校表によれば、月野小学、設立明治七年、教員男子一名、生徒男子三八名とある。

月野小学校沿革史によると明治七年四月下岡小学創立、茅葺屋根十六坪、竹床、莚敷、宮崎県第十一区第一区三十五番小学と称した。

明治七年より同十二年まで上等下等小学と称す。同九年十月、上等下等小学校教則実施により各分校独立して月野は第五大学区宮崎県第二十七中学区第三十一番月野小学と称す。

この沿革の資料は九年七月十三日下等小学第八級卒業証によったというが、七月までは宮崎県であり、八月二十一日宮崎県は鹿児島県に併合されたから十月は鹿児島県の筈である。九年十二月三十日下等小学第七級証書によると、鹿児島管下第二十七中学区第三十一番月野小学と記してある。

明治九年十月、上下等小学校教則実施により各分校を独立させたが、以後郷校はその郷名を小学校名（岩川、恒吉、志布志小学校）とし、分校は皆その所在の地名を以て校名とするようになった。

奴久妻兼修の教員辞令を記す。（年号は明治、辞令略記）

壬申（五年）九月	小学生申付	第十九郷校	（都城県）
壬申 十月	助教寄申付	郷校	〃
癸酉（六年）	粟一表　勉励褒美	第二十一郷校	
癸酉 五月	助教寄　俸禄八俵	第五十四郷校（鹿児島県）	
甲戌（七年）十月	一級生と助教寄（同日付二枚）	第五十四郷校	
九年 四月	第一村校助教	戸長役所	
十一年五月	坂元村校教員補助	戸長事務扱所	
十二年二月	須田木小学教員	鹿児島県	

十四年十二月　神牟礼小学助訓　囎唹郡役所
十五年　三　月　坂元小学準訓導　囎唹郡役所

郷校の教科書については、大統歌、神習草、和訳万国公法、改鐫智環蒙、博物新編等があてられたが、八年五月に出た鹿児島県所定の変則小学校規則によれば、これらの諸書の中で、三字経、孝経、書経、蒙求、十八史略、元明史略、博物新編、公私日用文章等が小学校各級教科書として採用されていた。

筆者（高木秀吉氏）は、「明治七年八月改正文部省刊行、師範学校編纂小学読本巻一」を所蔵している。内容は文字も挿絵もすべて木版で、文章は文語体、変体仮名が相当混じっている。当地方では当時このような読本を使用していたのである。

明治八年六月になると、変則小学校規則が出て、各郷校はこれに準拠させた。規則には士族に限らず、平民の子弟を入学させることを明示したが、事実は平民子弟の入学は稀であった。八年四月廿九日、学務課が設置され、学校行政が確立された。

教員養成機関としては、小学正則講習所を設立した。生徒は官費と自費（授業料月三銭）の別があり、諸郷から満十六歳乃至四十五歳の者一二名選抜、八年九月、試験をして入学させた。これが師範学校の前身になるわけで、九年三月廿三日小学正則講習所を鹿児島師範学校と改称した。

校長は島津珍彦であった。募集人員七十二名、各郷から満十八歳乃至四十歳のほぼ学力ある者二名宛を選出させ試験の上入学させた。女教員養成のためには、男子の講習所と前後して小学正則女子講習所を設立し、女子師範学校と改称して、九年十月廿五日開校した。校長は男子と同じく島津珍彦であった。こうして正則講習所（師範学校）で郷校教員の正則による再教育が出来たので、漸次各地の郷校に正則を施行し、郷校に地名を冠せた小学校とした。九年中には大体県下一般に正則小学校が普及された。

中学教育としては、本学校がほぼ中学程度の学校で、これは八年四月学務課設置と共に廃止されて変則中学校となったものと思われる。九年八月廿六日変則小中学校は廃止、同日英語学校並びに准中学校設立さる。これらの学校は西南役で廃校になり、鎮定後、鹿児島学校、鹿児島中学校として復活した。

明治十二年九月教育会が制定され、学校は小学校、中

学校、大学校、師範学校、専門学校その他各種とした。学齢は六年から十四年に至る八ヶ年とし少なくとも十六ヶ月は普及教育を受けなければならないとした。公立小学校での学期は八ヶ年とし、土地の便宜によって四ヶ年以上を以て短縮出来た。

十三年十二月改正教育令が公布された。公私立学校の設置、廃止を取締り、就学の督責を厳にし、小学校の学期及び授業日数、時間に改正を施したことで、公立学校、幼稚園、書籍館等の府県立のものは支部郷の認可、町村立のものは府知事県令の認可を受け、私立もその設置、廃止は府知事県令の認可並びに開申を要するようにした。そして小学校の学期は三ヶ年以上八ヶ年以下、授業日数を毎年三十二週日以上とし、授業時間は一日三時間以上六時間以内とした。

十四年五月小学校教則綱領が府県に布達され、同六月には小学校教員心得が頒布された。同七月中学校教則大綱、八月師範学校教則大綱の発布等があった。

十八年八月教育会が改正された。これは小学教場の制を立て、学校資金の節減を図り、学務委員を廃して、戸長の掌裡に移した。府県立学校、町村立学校では授業料を徴収することにしている。

十九年、文部大臣森有礼はいわゆる学校令を発布、小学校を基本に整然たる系統をつくった。すなわち尋常高等の二等を設け、高等小学校、尋常中学校、高等中学校、帝国大学へのコースと高等小学校、尋常師範学校、高等師範学校へのコースを明定した。初等教育では、小学校を高等、尋常二等とし、外に小学簡易科を設けて尋常小学科に代えることが出来るようにした。学齢は六年から十四年の八ヶ年とした。

右の学校令によって、恒吉が尋常科、大谷が大谷簡易科小学、月野が尋常科、坂元が坂元簡易科小学校など改称した。

恒吉村の学務委員は「勝目文書」によると明治十二、三年頃、中島義貫、十四年頃、勝目政隆、二十三年頃、小田長良、その後松下景広であった。

明治二十三年改正小学校令が出て、小学校の修業年限を尋常小学校は三年（又は四年）、高等小学年二年あるいは三年（又は四年）として、従来の小学簡易科は廃して、専修科（高等小学校）、補習科（高等尋常小学校）を置いた。

明治二十三年小学校令改正後十ヶ年。時勢の進歩につれて自ら改正の必要に迫られ、三十三年八月勅令で新た

に小学校令が出た。

その特色は授業料を徴収しないことを本体とし、義務教育年限を四ヶ年とし、その上に修業年限二ヶ年の高等科を併置することを奨めた。

明治二十年代ごろの学校は、尋常科四年、高等科四年であった。当時恒吉は高等科は三年までであった。恒吉の高等科三年を卒えると、岩川には四年があったので、普通は岩川校に入った（遠矢長氏談）。

恒吉小学校は勝目文書によると、明治五年の創立から十九年迄は、旧地頭仮屋で授業をし、家屋の構造は不完全であったが、明治二十年に新築し、「構造稍々美観を呈す」ることになった。遠矢長氏の話によると、この新築の校舎は八十坪位の建物で、教室の中に廊下が通り、その両方に小さい部屋（教室）が五つくらいあった。

恒吉小学校は明治三十三年起工、同三十五年に竣工した。大小四家屋に分かれ、二三二坪「構造頗る壮観なり」と記録にあるので、その当時はきれいな建築であったろう。工事費はおよそ四千円であった。当時の村長川畑篤徳。

このころの学校建築について、遠矢長氏によると、学校建築費は当時大字負担で、大字区民に対してほとんど割付寄附をもらって建築費にあてたそうである。大字長江は戸数は少いのに（百余戸）、大きな学校をつくったので、各戸の負担はもっとも大きかった。その頃の学校建築は、校舎の建設だけを大字が負担し、その後は村費で敷地拡張をした。

大谷尋常小学校改築に際し、明治三十二年一期分参銭四厘とか五厘など恒吉村役場から有村小四郎、飛佐早右衛門等へ「上納致すべき事」とした納付告知書があるが、校舎は校区民が負担したのであろう。

小学校就学については、義務教育とはいいながら、完全とはいかず、仕事をしたり、子守に行ったり、などで学校に出ない子供も相当あった。これはずっと後までつづいたが、明治三十七年ごろの情況を「中内伝左衛門日記」に見よう。

四月三日、
生徒勧誘の為、岩元、久保崎方面へ出張、永吉方に立寄り、夫より勝目時蔵（出）、池井（不）、川辺（未詳）、大高（不）、吉原（不在）、牧野（未詳）、岩永（不）、大高氏にて昼食迄頂きたり。
四月五日、
出校、午後家門に入らずして、久保崎方面に生徒勧誘の

ため出張。
川辺甚平氏宅にて日暮れたり。玉子と山芋の吸物に焼酎の馳走を受く。晩食を了して、数時間相談せしも、遂に目的を達せず。
然るに吉村市太郎殿酔うて来給いたり。少しく腹立たる迄に冗談など申したり。然る所同氏宅へ行かねばならぬこととなり、川辺氏と共に参上せり。吉村殿宅に至りたるに鶏の御馳走あり、焼酎を傾けしは実に鶏鳴の時なりき。二番鶏に川辺氏帰宅、予は吉村殿と徹夜且つ飲み且つ談したりき。

右の中、四月三日の生徒勧誘先の姓の下のカッコの「不」は勿論学校に出ないというのであり、「未詳」もある。七戸訪ねて出校は一戸だけで、勧誘の苦心が伺われる。
五日は夕食の馳走になり更にその後数時間相談しても「遂に目的を達せず」とある。その後は、夜を徹するほどの苦労を重ねている。
中内伝左衛門は当時月野小学校教師であった。放課後、「家門に入らず」すなわち家へも帰らず、部落を勧誘に廻った様子がよくうかがえる。
四十年三月、小学令が改正され、義務教育を延長し、尋常小学校の修業年限を六ヶ年、高等小学校を二ヶ年、あるいは三ヶ年とすることが出来た。この年に尋常科を卒業した人達は、四月から六ヶ年制の尋常科に入り、結局尋常科の卒業証書を二度もらったことになった。
大正三年一月、桜島噴火によって、恒吉は甚大な災害を受けた。財政欠乏のため、四月大谷、須田木の各尋常小学校を恒吉校の分校とした。
後、昭和三年、四月になって大谷尋常小学校は独立、

明治時代の教科書

須田木は昭和五年三月、須田木尋常小学校として独立した。

県立中学造士館退館事件

県立鹿児島中学校と公立鹿児島学校が、明治十七年十二月合併して県立中学造士館となった。造士館は初等・高等に分かれていたが、十九年尋常・高等の二つとなって幾多の人材を生み出した。

この学校で二十年六月、一五四名の退館者がでたが、全員が郷士出身である。退館の理由として西南の役以降貧困にあえぐ中で地方から出てきた生徒たちは、造士館での寮生活等学費や生活費が追いつかず退館したといわれていた。しかし本当の理由は寮生二名が朝の食事をこぼしてしまったことに対して、城下士出身の舎監が、「田舎ごろ」と叱責したことに起因する。これは郷士に対する侮蔑であるとして郷士出身の寮生たちが館に対して抗議したが入れられず、逆に退館を命ぜられたことが小林市の赤木文書により判明した。実際は地方の裕福な郷士出身の家庭の子息で、貧困にあえぐ家庭ではなかったはずである。

この事件で、岩川郷出身の牧瀬祐保、川崎祐利、浜崎嘉之助、恒吉郷から川畑篤恭（第二小隊組長）、志布志郷月野村から安荘実義の五名が退館処分を受けた。

前途有為な少年たちが遊学の志半ばにして無念やる方ないものがあったと察せられる。

牧瀬と川崎はいとこ同志であり、牧瀬は退館後上京して司法関係の仕事をしていたということを聞いたが、詳細にできなかった。

川崎は明治元年生まれ、岩川尋常高等小学校を卒業し、授業生（教員）として同校に勤務していたが、十八年中学造士館に入学した。在学一年で退館、再び教職につき市成小学校や坂元小学校に在職、その後宮崎県巡査拝命、転じて岩川の郡役所に二年、二十九年岩川警察署巡査となり、巡査部長で退官した。また町会議員二期、学校後援会副会長等もしている。

川畑は退館後、上京して第一高等中学、慶応義塾を卒業後、退館させられた造士館と県立一中の教師などを経て慶応義塾大学の英語教授となった。父は恒吉村長であった（九章人物の項には退館は記してない。）。

安荘は父金左衛門の時代、一向宗禁制に関連して、川内から移住してきた一族であるが、退館後帰郷し、岩川の郡役所に勤めた。

岩川町の奨学資金

大正八年二月奨学資金条例を設定し、該資金から生ずる収入の幾部及奨学資金に指定の寄付金其他毎年三百円ずつ蓄積し、これから生ずる利子で前途有望な子弟で学資を自弁出来ないものに対し学資を貸与している。大正十四年ごろの蓄積高二千二十余円に達していた（大正十四年三月「囎唹郡案内」）。

各校の交流

明治二十四年五月、岩川町で郡小学校運動会が実施されているが、勿論町村内の連合運動会も行われている。明治三十三年五月には、郡内大運動会が東志布志村（志布志町）で開催され、坂元小学校は泊まりがけで参加している。連合運動会は岩川では小平原が使われ、恒吉では貝ヶ塚が使われた。遠い場所の場合、五、六年の高学年だけ参加したものである。記録には、大正六年、郡連合運動会が志布志中で開催、各校尋常五年以上が参加したとか、大正八年十月、囎唹郡内児童大運動会が末吉校で開催されたが、各校の対抗意識が烈しく、なかなか盛んであったとある。また小学校の運動会には付近の学校の選手の遠征が多かったものである。

大正三年六月九日、岩川、月野、松山、末吉、財部五ヶ村の児童大会が、末吉男子校で開催された。各村から参会した児童数は四一三名で、郡視学、各村校長、父兄等多数の参観者があり、午前中児童の討論並に左記の演説があり、午後は運動会を開いて盛会であった。演説者児童名と演題は次のとおりであった。

岩川校山口実「川中島の戦」月野校中内二郎「軽率にあるな」松山校長浜熊彦「桜島爆発によりて得たる教訓」末吉男子校高木定秋「我村の紹介」末吉女子校前田ミサオ「新しい亀と鶴」財部校蓬平栄「質素」。

この児童大会は大正五年にも末吉で開催された。五年十月十八日、末吉尋常高等小学校で、郡主催連合高等科児童大会を開催したが、参加校は前回と同じく岩川、月野、松山、末吉、財部の五ヶ村であった。

大正十一年十月十三日、岩川校にて中部児童大会が開催された（「永田勘右衛門日記」）。

郡教育施設計画

「贈唹郡案内」（大正十四年発行）から当時の教育の一端を知ることができる。

大正十三年度贈唹郡教育施設計画事項

一　新計画事項

(1)　教育研究修養施設　イ、郡各科研究主任会の系統的研究奨励をなす。六月十四日、郡全委員会の打合会、各部（南、中、北）にて打合会、研究報告、十一月中旬教育研究会席上に於て。　ロ、学校研究会の内容改善　ハ、町村相互学校視察の奨励。　ニ、各教師研究題目の報告並に懸賞論文応募の奨励。　ホ、研究の補助、　ヘ、視察の場合学校並に個人としての研究修養状況の試問

(2)　学校内容充実施設　イ、学校経営並に学級教育案の立案及其実施の励行　ロ、自学自習の設備の学校とし又学級として実施し其の活用の奨励　ハ、学習法の研究改善　ニ、補欠授業の励行　ホ始業終業時刻の確守　ヘ、学校検閲及学級検閲法の改善　ト、結果の考察統計的研究の奨励　チ、交換教授並に隣校との児童参観の奨励　リ、講習会の結果整理

(3)　補習教育の改善振興　イ、農業教員会及補習学校教員研究会の合併　ロ、補習教育相互参観　ハ、補習学校生徒学齢簿学籍簿の整理、就学歩合出席歩合の向上

二　専任教員任用の奨励

(4)　社会教育の振興　イ、社会教育主事の任用　ロ、社会教育研究機関の設置　ハ、図書館の設置普及及び利用法の指導　ニ、模範部落の設定指導　ホ、青年団婦人会処女会幹部巡回指導講習会開始　ヘ、模範農家の設定指導　ト、諸会合の統一、連絡を図る事

(5)　各町村教育計画の遂行督励　イ、学校の主要努力点及個人の研究題目の報告及其査閲　ロ、町村学校研究会の奨励

三　国民学校

昭和十六年四月、国民学校令が施行され、各小学校はそれぞれ国民学校と改称した。

国民学校令第一条に「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」とあり、同令施行規則にも「教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉体シテ教育ノ全般ニ亘リ皇国ノ道ヲ修練セシメ特ニ国体ニ対スル信念ヲ深カラシムベシ」とある。

尋常科を初等科として、初等科六年、高等科二年を義務教育とした。教科内容は、国民科（修身、国語、歴史、地理）、理数科、体練科（体操、武道）、芸能科（音楽、図画、習字、女子は裁縫）とし、高等科に実業科を加えた。

こうして学校教育も戦時体制に入り、食糧増産、勤労奉仕など銃後国民の苦闘の中に置かれた。

なお国民学校は昭和二十二年三月まで続き、四月から小学校となった。

四　学制改革

昭和二十二年三月、六、三、三制が実施されて、小学校六年、新に中学校を設け三年とし中学校までを義務教育とした。そして中学校の上に三年制の高等学校が置かれ、高等学校の上に四年制の大学と二年制の短期大学が置かれることになった。

郡学制対策委員会は郡内の県立四校（末吉高女、岩川工業、志布志中学、志布志高女）をいかに配置するか協議されたが、この委員会で岩川高校に従来の工業系に加えて、文理系が併置されることになった。

県下の高等学校の学校差をなくすることや教育の機会均等をはかる為に、普通科については学区制を設けることになり、郡内各町村から委員を選出、対策を協議することになった。郡単位で学区制について協議し、まとめたものを県の協議会に出した。郡から県に出た委員は、徳留斌、飯田直であった。

岩川中学校

岩川中学校は昭和二十二年五月二日開校した。

中学校開校当時はどこの学校でも苦労が多かったのであるが、岩川中学校から当時の状況の記録を寄せられたので要点を次に記す。

昭和二十二年五月二日午前十時から岩川小学校講堂を借りて開校式を挙行した。

生徒は九学級に編成し、一年生四学級、三年生二学級計六学級は岩川小学校の校舎の一部を借用し、二年生三学級は岩川青年学校校舎の一部を借用、そして小学校の講堂裏の一室を職員室にした。机、腰掛、黒板など授業にもっとも必要な備品もなく、小学校の余分の古いものを、教師と生徒と協力し応急修理し、なお不足分は戸をはずして机代用にするなど、職員は授業開始準備に奔走

して、漸く五月十日から授業を開始した。

こうして学校は始まったが、教科書の不備、更に入手困難、被服学用品の不足、粗悪、食糧事情の窮屈、借物の教室、教具等の不足で、学校運営もなかなか困難であった。しかし新しく出発した学校を早く軌道にのせようとする学校の努力、次第に落着きをとりもどして来た社会、机、腰掛などしだいに新調されて明るさを取りもどし、希望をもって活気づいてきた生徒たち、それに環境整備など後援に乗り出したＰＴＡなど、苦労の中にも着々と歩みを進めて、最初の一年を閲し、二十三年三月二十三日には第一回の卒業式を挙行した。

この年三月末日には青年学校が廃止されたので、新制中学は青年学校跡に移ることになった。この青年学校の校舎は戦争中空襲によって焼失したので、松山から兵舎であったバラックを移したもので、間仕切りもなく、中央の廊下を境に南と北に細長い広間があるばかりであった。こんな仮校舎を職員生徒の手で応急修理をして教室にした。しかしすき間からは次の教室がのぞかれ、声は通るし、支障も多かったが、その中、町費約十万円が計上されて、間仕切りをし、窓には硝子を入れて、ようやく教室らしい形を備えることになった。

当時アメリカ軍政官ボートが本校を視察して、前述のような状態を見ることもあった。この実状を見兼ねて、ＰＴＡでは幹部が町当局並びに町議会議員を個別に訪問して、学校の窮状を訴え、建築に協力方を懇請するなど奔走し、世論も喚起したので、遂に二十四年二月十七日になって、校舎建築が町議会で決定した。

恒吉中学校

恒吉中学校は昭和二十二年四月一日恒吉中学校並びに同坂元分校の設置が認可され、同年五月二日恒吉小学校で入学式を行った。授業は本校は恒吉小学校、分校は坂元小学校併置で行われた。

恒吉中学校の独立校舎については、別項「行政」に述べたような事情で、結局現在の校地西堀込に決定し、昭和二十六年八月二十八日校舎が竣工した。

月野中学校

今の中学校と小学校の間に、青年学校があり、そこに村有の建物があった。昭和二十二年新しく出来た中学生はその建物に入っていた。二十三年になって現在の中学校のある所に校地を整地した。その頃は段々畑であった

のを、整地した。中学校が新しい校舎に移ると、それまで入っていた建物は保育園になった。中学校の建物は補助も混ぜ村有林をあて、三百万円で建てた。この残材は仮設住宅を建てた。

五　教育組合からＰＴＡ

教育の振興と学校運営に対する財政援助など目的とした機関が、各学校単位にできたのは明治のころからである。

坂元校区では明治四十五年四月、教育組合組長に藤井正平がなり、貧困児童救済基金寄付募集を実施している。任期は二年一期とし無給であった。

大正七年、教育資金積立のため各戸年鶏卵一個提供（九年七月鶏卵を大豆一升に変更）、大正八年三大節を創始、酒肴券（一戸拾銭）発行を決めるなど活動しているが、大正十二年三月教育組合を廃し、校区後援会を組織、四月より発足した（段坂元方限沿革より）。

志布志小学校の後援会の発足が大正十四年であるので、大体このころ各校の教育組合が後援会に衣替えしたと思われる。

太平洋戦争終結後の昭和二十一年三月来朝したアメリカ教育使節団の勧奨によって、学校と家庭が協力して教育の向上をめざす組織を作ることとなり「父母と先生の会」すなわちＰＴＡ結成が始まることとなった。

昭和二十二年三月、文部省は「父母と先生の会―教育民主化への手引」を各都道府県に配布した。従来財政援助が主目的みたいになっていた学校後援会を解散し、新たにＰＴＡがここに発足することとなった。

第二節　教育行政

学制公布以降、郷村の行政機関は教育との関わりができたので、学校の係を置いており、町村により学務係、学事係等と呼んでいた。

昭和二十三年七月十五日教育委員会法が公布され、教育の民主化、地方分権化、教育行政の中立という趣旨を実現するため、一般行政とは独立した機関として教育委員会が地方教育行政を司ることとなった。

都道府県に委員会（七名）、市町村に地方委員会（五名）を設置することになったが、委員は公選制であっ

た。県教育委員会の選挙は十月五日行われ、岩川の二階堂三郎が当選した。町村の教育委員会は二十五年十一月まで設置となっていたが、改正され二十七年十一月一日まで設置することとなった。

したがって岩川、恒吉、月野の町村教育委員会は二十七年十一月一日発足し、学校教育、社会教育の事務を扱うこととなった。委員は選挙による委員四名と町村議会選出委員一名の計五名であった。

委員の公選については、政党と教育行政の関わりなど中立性が保たれないとか、教育委員会が首長と行政上の対立を生ずることなど問題があるとして、三十一年に委員の公選制は廃止され、議会の同意を得て首長が任命することとなった。また教育長も委員の中から教育委員会が任命することとなった。

教育委員会事務局は、町村合併時、総務課と社会教育課があり、学校教育は総務課の所管となった。五十一年四月社会教育課の所管であった社会体育が独立し社会体育課となったが、平成元年四月一日再び社会教育課に統合された。教育長、教育委員長を記すが、二十七年十一月から翌年三月までは教育長は役場の助役か関係課長が兼務していた。

岩川町

教育長　兼務不明　町田辰巳（28・4）

教育委員長　川崎魁（27・11）

恒吉村

教育長　野上田功（兼務27・11）〈合併まで〉

教育委員長　南牟礼篤義（27・11）

月野村

教育長　井上徹志（兼務27・11）　最勝寺俊信（28・4）

教育委員長　蔵岡金之助（27・11）

大隅町

教育長　町田辰巳（30・1）最勝寺俊信（30・4）

山口静哉（31・10）　宇都重義（40・10）　岩崎宗雄（48・10）　田中毅（50・12）　蛭牟田三士（56・10）

教育委員長　蔵岡金之助（30・1）　岩永藤三（35・10）　川崎祐幸（46・10）　久保田幸男（54・10）　吉留辰雄（61・10）　久保田幸男（63・10）

第三節　青年教育

教育召集

教育召集は明治四十四年十二月から各学校で実施されたが、大正五年の記録によると、このころ小学校卒業生に対し学校では教育召集を行っていた。規定によって、各学校共毎年三回執行した。学校では応召者に簡単な試験を行い、小運動会も開き、また村吏員、村農会役員等はつとめて参列し、勧業教育に関する講話をした。後年は年一回の召集となっている。

実業補習学校

明治二十六年定められた実業補習学校規程によれば、学業補習学校は小学卒業生に教育の補習と職業に関する知識技能を授けるとしているが、県は、大正六年補助規定を設け補習学校の普及をはかった。

大正六年四月、岩川農業補習学校の設立を始めとして、漸次各町村に設立されるようになり、現在は郡内の学校数二十三で、生徒数男一六七四名、女四二二名、合計二〇九六名である。専任教員も漸次充実しつつあり、専任教員をもつ学校は十校、教員数は十四名に及んでいる。この中、西志布志、大崎の二校は、専任の校長を置いている。就学出席共にまだ十分ではないが漸次向上しつつある（大正十四年「贈吠郡案内」）。

実業補習学校は岩川町内は各校、岩川、笠木、折田に設置され、各学校に先生が巡回して来た。先生は二人位で、農業の先生であった。生徒は高等小学校を卒業して補習学校に入学、笠木の場合は生徒三〇人くらいであった。学科は普通農業が主で、蔬菜園芸、修身、ソロバンなどで、実習は園芸、大根や菜葉を作るものであった。通学の時自転車の後に鍬をつんで行くのがいやなものであったという（永田瑞義氏談）。

なお、補習学校は、恒吉、月野にもあった。

青年訓練所

大正十四年の軍備縮小会議で師団を減らし、戦艦の製造を制限されることとなったが、これを補う方策として、軍隊の猛訓練と銃後の青年教育を重視した。こうした世相の中で、大正十五年七月一日、青年訓練所令が公布された。

青年訓練所は十六歳から二十歳までの男子を対象とし、週一回の教育訓練を行い、年一回連隊区司令官、又は部内の将校によって教練査閲及び県社会教育主事によって学科査閲を行うことになっていた。査閲の始まる時は、皇太子殿下の令旨「国運進展の基礎は、青年の修養にまつ事多し云々」を読するものであった。青年訓練生で所定の教育修了者は、陸軍在営年限の短縮という特典があった。教育内容は補習学校教育の外、特に軍事教練が重きをなした。したがって在郷将校が主任指導員となり、下士官が指導員として軍隊そのままの教育を施したのであった。

週一回の訓練は酷しく、一月で地下足袋の底が磨り切れる程であったという（八反田清則氏談）。

公民学校

大正十五年四月、青年訓練所令の発令に伴い、県では三月、実業補習教育実施要項を改正し実業補習学校を公民学校と称し得ることとした。昭和の初めから補習学校に対し中等公民学校の名称を付け公民教育の目的を明らかにした。中等公民学校は、その後公民学校と称し、青年訓練所を高等公民学校と呼んだが、大体青年訓練所と実業補習学校は小学校に同居しており、校長や教員は兼任で、生徒も五〇％は二重在籍であった。昭和五年、青年訓練所との統一をはかるため小学校併置の公民学校を廃止し町村単位の特設公民学校の設立を促した。

岩川公民学校は前期二年、後期二年で、前期は尋常科卒業生、後期は高等科卒業生であった。後期生は青年訓練にかかり、前期はただ教育だけ受けた。

昭和六年十一月、伊敷練兵場で天皇陛下の御観閲を受けたが、こうしたことから社会も青年教育に関心を持つようになり、各郡二、三ヶ村は専任校長をおく学校も出来るようになった。

青年学校

公民学校と称した青年訓練所と実業補習学校は、教育目的も内容も大した差はなく、相互関係の調整は発足当初からの課題であったが、昭和十年これを統合して青年学校とした。

青年学校に普通科・本科・研究科・専修科を置き、尋常科卒業者は普通科に、高等科卒業者は本科に入学させた。普通科二ヶ年、本科は男子五ヶ年、女子三ヶ年とし、状況により各一ヶ年短縮することができた。また本

科は一部と二部に分かれ、一部は定時制であった。

昭和十四年、義務制となり、昭和二十二年廃止されたが、町内には岩川、月野、神牟礼（恒吉）に青年学校があった。

岩川青年学校

岩川青年学校は今の教育会館のある所であった。あの場所にはもと郡役所があったが、郡役所は今の合同庁舎の位置に移っていて、そのあとの建物が残っていた。この建物に青年訓練所から公民学校が入ったのであった。

県道から門を入ると、左手に二階建ての建物（推定地坪三十坪くらい）の本館があり、向こう側に庭を隔てて県道側に向かいに平家の三教室があった。本館は階下は校長室、職員室、その他、階上は会議室であった。郡役所時代はこの本館に郡長がいた。平家の方は郡役所時代の事務室で、学校になってからは三教室使った。この教室の裏は実習地であった。庭に大きい山桜があった。

昭和十一年ごろまでこの地にいて、昭和十二年には、天神山の下、今の岩川中学校のある所に移転した。当時の建物は七教室と職員室、家庭科教室などであった。

青年学校の教科は公民科（社会と修身）、普通科（国語、数学）、職業科（男子は農業、女子は家庭科裁縫料理）、教練科（軍事教練）の四科であった。

職員は校長、主席の外職員八名ないし十名くらい、指導員三人くらいであった。教練科は軍人出身の将校の外に指導員（大体下士官で嘱託非常勤）がいた。

生徒は前記四科を学んだが、単位は時間数で制限し、所定の時間数がないと進級、卒業が出来なかった。

当時は軍が絶対の位置を占めていたころで、教練が厳格であったが、年一度の査閲には連隊区司令官（代理の時でも佐官級）が来て査閲をした。この査閲が一番おそろしいものだったと関係者は当時を追想して語るほどである。一般の教科については、県から随時査察に来た。学校経営、生徒の実態などについて調べた。

青年学校の就学は、尋常科卒業生は普通科に入学、高等二年卒業生は本科四年制に入学する。本科を卒業すると、研究科一年制に入るが、この時が徴兵検査になる。

なお、前記の普通科、本科、研究科のコースは一部と言い、他に二部制があった。この方は定時制で最初の二年間は週に四日ないし五日出校、後の二年間は週に二日ないし三日出校する。この課程を終えた人は青年学校の全課程を卒業したことになる。

このほかに岩川青年学校では経営科を昭和十三年ごろからはじめた。これは営農自営者を選抜して、年間学校に住み込んで勉強と実習に打ち込んだ。人数は少数精鋭で四名ないし六名であった。耕地は田六反五畝、畑一町五反、果樹園芸二反、それに牛二頭、馬一頭を飼育した。

今、岩川中学校の上の方に「学寮」といっている家が、この経営科の生徒の寮であった（当時岩川青年学校に勤務された坂元貞雄氏談による）。

山口長至校長が敷根青年学校長から恒吉青年学校長に赴任した時は、神牟礼に青年学校が出来て間もないころであった。山口校長は校庭や農地の整理を手がけた。農地は開墾をして一町歩ばかりで、食糧増産の時であったので甘藷作を主に、蔬菜、牧草などつくった。部落にも青年班をつくって甘藷作りを奨励した。畜産に力を入れて、馬を飼育して優良馬をつくるよう教育した。馬は北海道産のもので郡畜産組合が斡旋してくれて、青年学校後援会から買ってもらった。一方、牛は能見という人が優良牛を寄附してくれた。それから青年学校には山林がなかったので、町に相談して二町歩くらい造林して、生徒に愛林の思想をうえつけることにした。

青年学校の職員は、校長、教頭、職員が四名（この中に女子職員が一人）、外に軍事訓練にあたる指導員が六人いた。生徒は前期は尋常科卒業生が入って二年、この二年を卒えた者と高等科卒業の者が入るのが本科で、四年間であった。この上に研究科が一年あった。学科は公民科は道徳や社会など、普通科は国語と数学、職業科は農業であった。そして教練が厳しく行われた。生徒の出校は一週一日で、月に四回くらい出席、農繁期は休むので、少ない時は一回くらいのこともあった。義務教育ではないのだが、義務のようにいわれていた。軍隊では青年学校就学を重く取扱っていたので、生徒には「青年学校手帖」を持たせ、それに学校の成績を記入して兵隊にいくとき持たせてやった。

山口校長の次は大崎の中塚南兵衛が校長に就任したが、長くない中に召集を受けた（当時の校長山口長至氏談による）。

岩川町立青年学校では、昭和二十年三月三十一日付で、当時県立霧島研修館主事兼副道場長であった徳留斌（末吉町出身）が校長に任命され、四月三日着任した。しかし着任後間もなく四月八日には召集を受け壱岐島の守備についた。学校では玉利教頭が経営にあたった。そ

の後は青年学校は積兵団が駐屯し、教室の大部分は馬糧の倉庫になり、兵員の宿舎にもなった。学校の授業は平常どおり実施されたが、昭和二十年八月六日の当地方が受けた大空襲で、青年学校の校舎はほとんど全部焼失した。

終戦後、二十年九月六日徳留校長は帰任した。そして焼失した学校の復興にあたった。学校にまず建築科を設け（二組計五十名）大田尾にあった兵舎二棟を米国係官の了解を得て、学校に移しバラック教室その他附属建物六百四十坪を急移築した。それから実務教育の必要を力説し、竹工科、建築科、木材工芸科、家庭科（被服科中心）等を附設した。

新学制の実施によって、昭和二十三年三月三十一日青年学校は廃止となった。徳留校長は末吉高等学校主事兼教頭として赴任した。（徳留斌氏談）

昭和十三年十月二十七日ドイツのヒットラーユーゲントが、八合原に来た。一行はミュルツ団長以下三十人で、当時既に二ヶ月間にわたって各地を訪問して南下、宮崎から都城を経て鹿児島へ行く途中であった。八合原では青年学校生徒等が迎えた。当時の写真が残っている。ユーゲント一行はこの時、西志布志村へも行った。

第四節　岩川工業学校

岩川は郡の中央にあり、県の出先機関も多いのであるが従来中等学校の設置がなかった。昭和十六年になって、岩崎與八郎が工業学校を設立寄附することを大津廿町長に申し入れた。当時大東亜戦争開戦が近づき、軍需工業が盛んになって行った時代で、工業学校の設立は時局にも合うと期待がかけられた。岩崎のこの申し出に対して、岩川町では町会を開会、満場一致でこれを採決した。学校設立については、岩川町と岩崎との間に協定が設けられた。それによると、岩川町は、学校敷地の買収、家屋の移転、地均し工事をなし、建築用材は全部町が用意し、総て製品にして現場へ届ける。製材賃は町の負担であった。地均し工事は町内全戸奉仕作業であった。

岩崎の方では校舎建築の大工賃、セメント工事、釘、屋根瓦、その他内容備品一切を負担した。これらの総額は後で建築した講堂も含めておよそ三十万円であった（金額は岩崎氏による）。

岩川町は工事資金として、中之内折田字鷹取の町有檜林十三町歩、中之内稲干段檜林七町歩、中之内瀬戸口檜林三町歩を売却して財源とした。工事一切の監督は桂栄一郎、牧之瀬勝助、東仲五の三人があたった。この中、桂栄一郎は岩崎の代理人として会計にあたった。建築の大工頭は川辺町の中薗清盛であった。

当時の町長は大津廿、助役は三坂篤、収入役は有川貞信であった。

初代校長は岡山県出身の神崎栄一郎であった（この項、桂栄一郎氏記録その他による）。

岩川工業学校の建築が着手され、棟上げまでこぎつけた所で、運悪く台風が襲来、折角棟上げしたのが倒壊してしまった。このままでは大変な損害になるので、倒壊によって折れたホゾを、材木を短かくつめて新しくホゾをつくり、もとの材木を生かして建て直した。それでの校舎は普通より低い家であった（この校舎は今は取り壊されているが、もと校長室、職員室のあった校舎であった）。

昭和二十一年三月、岩川工業学校教務主任として勤務した山口長至氏の話によると、科は建築科と応用化学科で生徒数は合わせて三百名くらい、職員は三十名くらいであった。山口氏は二年勤務して、二十三年八月追放で辞任した。

岩川工業学校は昭和十六年三月三十一日鹿児島県岩川工業学校として認可され、同年六月十日に入学式を挙行した。しかしまだ校舎がないので、岩川青年学校の一部を借りて授業を開始した。当時の青年学校は現在の岩川中学校のところにあった。十八年になって新校舎が出来たので、四月十三日新校舎へ入った。そして翌十九年四月一日県立移管になり鹿児島県立岩川工業学校と改称した。

岩崎與八郎

岩崎與八郎は明治三十五年五月一日岩川の町に生まれた。父は宮崎県小林の斉藤斉で、母岩崎たねと結婚したが、父は大酒豪のために離婚したので、與八郎は母方の岩崎姓になった。母は、母の姉婿馬場嘉次郎が岩川で製糸業を営んでいて、女工を使っていたので、その監督をしていた。その後母は岩川でみどりや旅館を経営した。岩崎の祖父は中島の一族で、祖母は月野市柴の市倉であった。市倉家は四国の土佐から、月野に移住して来たという。市倉は当時市倉門の名頭であった。

岩崎は岩川尋常高等小学校を卒業すると、熊本幼年学校を受験した。学科試験、体格検査とも合格し入学したが、その後体格検査で不合格になった。岩崎は、中山嘉兵衛（元貴族院議員）の経営していた岩川醸造株式会社に勤め、最初二年間くらいは焼酎原料の甘藷の買付をしたが、その後は焼酎や荒物の営業と経理を担当、自分で注文をとり、仕入れも行ったので、その経験がその後の事業に役立った。

その頃、曽於郡では志布志線の鉄道が敷設されることになり、鉄道関係の人達や工事請負者の早川組早川昇策などが、岩川の母の経営するみどりや旅館によく宿泊していた。これらの人たちは、鉄道枕木が非常に有利なことをよく話していた。この話を聞いた岩崎は、何とかして鉄道省の御用商人になりたいと思った。二十一歳で徴兵検査を受けた後、すぐ運動をはじめ、度々上京して、当時の鉄道省に許可を願ったが、仲々許してくれなかった。そうしている中に、大正十二年東京大震災が起きた。その頃早川昇策の東京牛込市ヶ谷の住宅の近くに、鉄道省の経理局長別府牛太郎の住宅があったので、岩崎は早川に頼んで、中に別府局長をよく知っている鹿綱道を立てて、枕木許可の交渉をしてもらった。丁度東京震災で枕木が不足している時であったので、岩崎の枕木を鉄道に買い上げようということになった。これから岩崎は製材所に枕木を造らせ、それを買い上げて鉄道に納めた。その後、鹿児島は勿論宮崎、熊本、大分各県、山陰、北海道などにも手広く事業をひろげ枕木商としては日本一となった。その頃枕木を鉄道に納めたのは県下では岩崎と鹿屋の伊地知半兵衛の二人で、宮崎県には都城に蔵満良之助が一人いた。

この頃郵便逓送を請い負った。これは逓信省で鹿児島駅から鹿児島郵便局まで自動車で郵便物を民間人に逓送させると聞いたので、その運動をした。当時は田中義一首相の時で、田中首相に対して岩川与助、永田良吉代議士は非常に勢力があったので、岩川与助に頼んで郵便逓送の許可をとった。そして郵便逓送をすることになったので、これを機会に鹿児島市へ移転した。

その後、枕木の方は国有林を払い下げて製材所に造らせた。高隈山の国有林を落札する時は、高隈村当局が一番札で、岩崎は二番札になった。しかし高隈村当局のは、印がもれていて失格になり、二番札の岩崎が落札した。額は一万八千七百円であったが、当時一万円以上の入札の出来る事業家はあまり居なかったという。高隈村

の入札は村役場で落札して、それを何人かの村民でわけるつもりであったそうだ。この国有林払下げで木炭を焼き、佐賀の鋳物製造所へ送った。当時金解禁の時で、世は不景気になったので、一円のものが八十二銭に下がってしまい、この分は損をした。

しかし枕木商としては漸次儲かって来たので、母の経営していた旅館を売らせることにした。これは枕木商を大きくやっているのに、「旅館の息子か」と人に言われるのがいやで、売らせてしまった。代金は千五百円であった。

その頃は不景気で枕木の買手が少なかった。大島の営林署で造っていた枕木があったが買手がないので、岩崎に買ってくれないかと話があった。そこで岩崎は大島に行って枕木一本を一円の割で買った。大島は木が年に二寸三寸と大きくなるし、大島には民有林が多いから買わないかと営林署長は岩崎にすすめた。実際に木にしるしをつけて翌年行って見ると、たしかに二寸三寸大きくなっていた。当時は不景気で買い手が無かったので、山林を買うということになると、村長が村民からたのまれて、紋付袴で岩崎の宿舎に来て、山林を買ってくれと頼みこんだ。

岩崎與八郎

松田隆一という人が山林三千五百町歩持っていたが、この人は事業に失敗して、朝鮮銀行や古河鉱業に担保に入っていた。この山林を岩崎は三十五万円で買い受け、担保も決済した。この山林を買ってから、山の盗伐があるということを聞いて、海岸で人に監視させた。ところが明らかに盗伐とわかっていても、他人の山林を伐ったと言い張るので、結局そのあたりの山林全部を買わなければならないことになった。

大島で造った枕木は、名古屋で鉄道に納めた。一船で枕木二万本三万本、船をチャーターして送った。チャーターについては、日本郵船、大阪商船から働きかけられた。

また中国の華中鉄道（日本経営）と大連の華北鉄道その他に枕木を送った。大島で一円の枕木が上海に送ると

一本十三円に売れた。運賃は一本四十銭か五十銭くらいしかつかないのであった。それで一船に五万本積んで送ると五十万円儲けた。こうして巨額の儲けをしたが、その頃、岩崎は夜中に目が覚めると、「一体こんなに儲けてよいのか」と何か恐ろしいような気さえした。しかし自分は大島やその他県下で枕木を買って、それを上海に持って行って売るのだから、正しいことをしているのだと自分で納得した。この枕木代は日本の華中鉄道の東京支社で受取るようになっていたので、上海では受取らなかったが、同社副総裁田誠と交渉して一割だけ上海でドルで受け取るようにした。当時上海には色々な品物が豊富であったので、上海で木綿二反、湯衣二反その他化粧品など、送ることの出来る範囲の品を買って、三州クラブの名簿を調べて知人に送った。

こうして儲けた金で、最初買った大島の山林の周辺全部を買入れた。後では高くなったが、その頃は一畝が二十銭か三十銭しかつかない所が多かった。現在大島にある岩崎の山林は、一万二千町歩は十分あるという。土地は大島本島で住用町、大和村、瀬戸内町、三方村（現在名瀬市）にまたがっている。大島では雑木を伐らして、松杉の植林を奨励し、補助をしてきた。しかし岩崎は板椎を育てることに努めた。大島では板椎は昭和四十三年現在、石三千五百円はするが、雑木を伐り払って松杉を植えた所は、造林費がかかった上に、山で石五百円か六百円にしかならない。板椎は萠芽造林で、造林の費用がかからないので現在雑木の六〇ないし八〇％だが、品種改良を行って、百％板椎にするつもりであるという。

終戦後、財産税が課せられたが、当時大島は米軍政下にあったので、岩崎は支払わなかった。その後大島が日本に復帰してから、財産税を支払った。しかしその時の財産の評価は終戦後当時のままであったので、支払は割安であった。もし財産税課税当時、大島が日本領であれば、財産税を支払う金がなかったので、恐らく山林を物納したことだろう。私としては運がよかったのだと岩崎は述懐した。

その後、昭和二十八年指宿に観光ホテルを建設、亜熱帯植物を背景に広大な施設をなし、本土最南端の佐多岬には展望台等、観光施設を整備、昭和三十八年有料道路（約九キロ）を開さくした。又薩摩半島南端、長崎鼻の整備の後、開聞岳では山麓一帯の広大な地域に亜熱帯自然公園を建設、食用サボテンの栽培、ゴルフ場、新婚樹園などもあり、南国的観光地を建設している。

伊豆の南端石廊岬一帯の雄大な観光を取り入れ、大温室を中心にした自然公園を建設、箱根紅葉丘には国際観光旅館紅葉園を経営している。

岩崎は観光開発に大きな構想をもち、系列会社の鹿児島商船の航路に今回ジェットホイルの船を運行させることとし、併せて南種子にホテルも建設することとした。ジェットホイルは今までの船の倍近くの速度が出るため、鹿児島、種子、屋久を結ぶ航路の時間が半分に短縮される。更に奄美、沖縄を結ぶ観光ルートも考えており、沖縄の豊見城（とみぐすく）の買収も終えている。

海外では、オーストラリアの東海岸に、キャプリコーン・イワサキ・リゾートを建設、一九八六年五月オープンした。ここは世界一といわれるグレートバリアリーフ（大珊瑚礁）の南の玄関口で、南回帰線の真下に位置している。総面積八八〇〇haで、東京の山手線の内側より広い土地に相当するが、長期滞在用のホリディユニットを中心に、四棟、四一〇室、一〇〇〇人が宿泊できる。ゴルフ場、テニスコート、ローンボール場、スポーツグランド、プールなどの施設や森林公園の散歩道、記念植樹園などもある。

またメキシコ政府の要請によって構想中のメキシコ・マグレナリゾートは、ロスアンジェルスからジェット機で一時間半、バハカルフォルニア半島南部の太平洋岸にある。二〇〇〇haの敷地に群立する巨大なサボテンや、冬期には回遊してくるグレイ鯨の大群など見られる海浜リゾートである。

岩崎産業は、当初岩崎商店として経営していたが、昭和十五年に会社組織とした。同社は鹿児島を中心に木材販売、木材防腐、電柱、枕木、石油販売、運送、ホテル遊園地経営など多角経営を行ってきた。

昭和十八年鹿児島造船所（後の鹿児島造船ＫＫ）の代表取締役、二十年東亜重工業ＫＫ代表取締役、二十一年鹿児島県木材連合会会長、同年鹿児島商工会議所副会頭に就任、二十二年鹿児島県林業会会長、二十六年オリンピック製菓ＫＫ社長となった。二十七年南薩鉄道ＫＫの社長、翌二十八年には曽於郡に縁の深い三州自動車ＫＫの社長に就任、大隅、薩摩の交通網の大部分を掌握することとなった。この年、指宿観光ＫＫを創設し社長となった。指宿観光ホテルである。

二十九年、沖縄に八重山開発ＫＫを創設、同年東京にオリンピック観光ＫＫ（観光バス）を創設し社長となった。三十三年奄美交通ＫＫ会長、三十五年鹿児島商船Ｋ

K社長となったが、この年、南鉄三州観光社KKを創設、三十六年屋久島交通KK取締役となった。三十九年になって三州自動車と南薩鉄道を合併し、鹿児島交通KKを設立社長に就任した。四十一年種子島交通KKの社長、同年屋久島交通KKの社長、また同年南海郵船KK（垂水汽船）取締役、四十三年会長、同年三月、鹿児島商工会議所会頭に就任した。同年五月には鹿児島新報社の社長に就任した。このように岩崎の事業は国内は勿論、国外にまで進展している。

なお、岩崎グループの会社（括弧内は資本金）等は、岩崎産業（四億五千八百万円）鹿児島交通（六億四千五百万円）指宿観光（三億五千八百万円）鹿児島商船（三億八千万円）南海郵船（二億七千万円）など八八社に及び、法人数は五法人である（平成元年現在）。

岩崎は戦前、喜入、弁財天で産金事業、造船、重工業を経営、また海軍向け船舶用機器の製作、志布志片倉製糸跡で陸軍の航空機部品を製造した。こうした重要工業に従事した関係で、高度の工業教育の必要を痛感し、昭和十六年岩川工業学校（現在の県立岩川高等学校）を創立して岩川町に寄付し、県立工業専門学校の開設にあたっては、建設資金として百万円を寄金した。鹿児島大学医学部の前身である県立医学専門学校の設立にあたっても、建設資金を寄金した。その後岩川高校には図書館建設資金やパソコン教育のためのコンピューターなども寄贈している。三十五年には、東京吉祥寺にある菊華学園（女子高校）の理事長に就任している。

四十三年、大隅町に土地買収費、建築費合わせて一億三千万円の予算で公民館を建設寄贈、又岩崎と夫人所有の土地（二万坪）を公園、総合グランドとして寄付した。

岩崎は郷里の青年団、婦人会などを研修のためたびたび招待した。三十年三月郡内各町の婦人会長等三十八人を東京に招待、四十二年十月大隅町議会議員、青年団、婦人会役員をバスで中部、近畿地方へ案内、岡山県のブドウ栽培、名古屋春日井市のサボテン栽培、和歌山の温州蜜柑栽培、大阪府の農林技術センターなど産業視察をさせ、婦人会員は更に東京まで招待した。四十三年には郡内各町婦人会役員を屋久島に案内したこともあった。

岩崎は早くから将来社会に貢献する有為な青少年の奨学育成に寄与したい考えがあったが、戦後の経済的に苦しい中で、上京進学する地方出身の学生を援助するため、昭和二十六年岩崎育英奨学会を設立し私財を投じて

東京都世田谷区にある一万八千坪の敷地に岩崎学生寮を建設した。岩崎は理事長に就任したが、育成奨学会をその後岩崎奨学会と改称、岩崎は会長となった。

岩崎学生寮は低廉な経費で居食をまかない、六十三年現在約九〇〇名の大学卒業生を送り出している。なお寮が古くなったので、三期計画で新寮を建設、平成元年二月全館完成した。鉄筋コンクリート三階建、収容数一二八名である。これは日本の学生の他、外国人留学生も収容する国際的学生会館となる。

また岩崎産業の創立五十周年、六十周年記念として県下六〇市町村と若干の県外市町村に、総額八億六千万円の奨学基金と青年・婦人育成金を寄贈し、県育英財団にも三千万円の基金を寄贈している。

県下中・高校の優秀な卒業生を表彰する岩崎賞も平成元年現在四十年になる他、奨学会からの優秀な学生に対する奨学資金の給付・貸与、あるいは海外留学研修生に対する留学費の補助等限りない育英事業を行っている。

財団法人岩崎美術館は、岩崎が多年にわたり収集した美術品と私財を寄贈し昭和五十八年、指宿観光ホテルの隣接地に開館した。建物は東京大学の槙教授の設計によるもので建物自体も専門家の注目を集めているが、展示内容は、巨匠アンリ・マチスの大作をはじめとするフランス近代作家のものや、県出身で日本洋画界をリードした黒田清輝、藤島武二、海老原喜之助などの洋画、横山大観、松村桂月などの日本画や著名人の書跡などがある。

岩崎は各方面へ貢献した功績により褒賞を受けた。

昭和二十九年文部省から産業教育功労賞を受け、三十七年には教育振興に寄与した功績によって紫綬褒章、三十九年には通信事業の発展に寄与した功績によって黄綬褒章を受けた。四十年には観光産業開発に寄与した功績により、国際アメリカ協会からアカデミー賞が贈られた。三十九年十月十日、岩崎の出身地である大隅町から名誉町民章が贈られた。

なお永年就任していた鹿児島商工会議所会頭は、六十一年三月辞任したが、辞任と同時に最高顧問に推挙された。

第五節　各種学校

岩川高等家政学院

岩川高等家政学院は昭和二十四年四月、岩川高等学校

併設として開校した。

当時は中学を出て高校に行かない人は、洋裁の勉強に都城まで通う人が多かった。その年の中学校の卒業式の時、岩川本町の二之宮正一等がミシンが数台あれば洋裁学校が出来るので、都城まで行かずにすむのだがと、父兄同士で話し合ったのがきっかけとなった。

当時岩川高校教頭は岩川出身の牧之瀬政雄であったが、大津廿、二之宮正一等が教頭の家に集まって、具体的に話を進め、学院をつくろうということになった。発起人は山口兵蔵、牧之瀬喜三次、牧之瀬忠、二之宮正一の四人であった。場所は高校に空き倉庫があったのを改装して教室にあてることにした。当時の岩川高校長は嘉村哲夫で、鹿児島の米進駐軍に許可を受けに行ってもらった所、学校は生徒だけでなく、一般市民も教育するところだから差し支えないとのことであった。

教師は専任に山下タマ（和裁）、洋裁と家政、社会、体育は高校の先生に委嘱し、授業料は月三百円、講師料は一時間百円位であった。月謝はその後三二〇円になったが、それは高校のミシンを借りたり、ボールを借りたりするため二〇円加算した。その中、ミシン裁ち台なども買い入れた。

修業年限一年で、希望者は二年、生徒は最初は三十四名位であった。

学院経営の母体は生徒の父兄であった。町から補助をもらえるように申請したが、最初の年はもらえず、翌年からもらった（岩川本町、二之宮正一氏談）。

町立大隅高等家政学校

大隅町立大隅高等家政学校は昭和三十二年四月十五日、校舎に充てられた旧青年学校寮で開校式を挙げた。初代校長は前町教育長の最勝寺俊信。敷地三三〇坪、校舎建坪七十六坪、総工費二〇〇万円。

開校一年目は本科、研究科合計八十名収容する。修業年限はどちらも一年、本科は中学校卒業者、研究科は高校卒業生等とし、将来本科は二年終了にする。教材は和洋裁、社会、国語、数学、食物、生花、茶ノ湯など一通り花嫁修業する（以上「南日本新聞」記事による。）。

高校併設の岩川家政学院が形を変えて、同年五月二十四日県教育委員会認可の下に、大隅高等家政学校として発足したのである。当時校長であった最勝寺俊信氏の話によるとそのころ、校長の他に和裁教師、洋裁教師各一名であった。普通教科は校長が受け持った。創立当時は

生徒三十余名で、旧家政学院から引き継いだ二年課程の生徒が五人くらいいた。生徒は町内各中学出身者の他に、伊崎田中、野方中、岩北中などからも入学した。

校舎竣工六月、その後四十一年二月天神丘に移転改築した。初代校長最勝寺俊信の後は、三十七年五月から岩川中学校長が兼任していたけれども、生徒数が少なくなり、四十七年三月廃校となった。廃校時の兼任校長は鈴校長、先生は桑迫ナルで、生徒は九名であった。

大隅高等職業訓練校

岩川高校の実習工場を利用して従来から技能者養成をしていたものを、昭和二十五年四月からPTA事業部の事業の一環として岩川高等学校技能者養成所と命名、家具工、機械工を養成することとなった。所長は校長が兼務した。

二十八年、岩川高校技能者養成所木工部となる。三十八年、岩川高校の養成所を閉鎖し、四月から泉木工技能者養成所を開所した。四十二年、大隅共同職業訓練所を開設し知事認可を受けた。四十五年、大隅共同高等職業訓練校と改称、四十六年、国及び町の補助を受け、桜ヶ丘の福祉センター裏に新校舎を落成した。

四十五年から全国技能者大会に出場しているが、脇元信一郎五位入賞、四十七年は山下恩が県で優勝したが、山下は後、勤労青年代表としてアメリカに派遣された。これらの他、津留幸弘、上野達一、上野輝秋、谷口義房、木原光夫、佐伯達也、松下義美、前田国則、佐伯達也、五位塚兼文等が出場し、入賞者を多数出しているが五十四年ごろまでが最盛期といえる。

五十二年、法人化して大隅高等職業訓練校と改称したがその後、生徒が減少して六十年三月で休校となった。

所長、校長は次のとおり（括弧内は就任年月）。

川上久雄（38・4）最勝寺俊信（49・4）平原清秀（52・4）村田素（59・4）

第六節　学校統合

過疎化や出産制限の風潮などにより、児童・生徒の数は減少傾向にあり、また町村合併による原因等もあり、学校統合が課題となってきたが、教育委員会でも教育内容の充実等、実効が上がるとして啓蒙に努めた。

大隅町児童、生徒の推移（昭和59年11月1日）

	年度／学校名	30	34	36	38	40	42	44	46	48	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	推計60	推計64
小学校	岩川		名 1,240	名 1,141	名 1,067	名 972	名 945	名 854	名 792	名 682	名 638	名 649	名 642	名 623	名 644	名 645	名 631	名 633	名 658	名 663	名 699	名 698
	笠木		486	475	412	320	260	215	201	179	154	144	122	109	99	95	84	74	83	85	89	87
	大隅北					538	493	414	331	263	197	169	148	141	125	115	110	100	105	99	108	72
	(折田)		199	208	208																	
	(坂元)		337	351	343																	
	菅牟田		278	277	259	233	191	149	123	99	91	84	73	68	63	51	39	37	31	28	34	36
	恒吉		294	277	258	238	222	188	416	324	259	246	207	193	171	160	143	125	118	112	103	88
	(神牟礼)		228	225	215	190	178	156														
	(須田木)		102	115	116	103	90	82														
	(大谷)		292	269	148	124	102	79														
	月野		669	604	575	495	437	355	291	238	216	186	163	161	152	154	132	133	127	123	127	126
	大隅南				369	347	314	270	222	187	138	115	95	88	79	69	73	70	66	63	61	53
	(桑之迫)		206	200																		
	(荒谷)		113	105																		
	計		4,444	4,247	3,970	3,560	3,232	2,762	2,376	1,980	1,693	1,593	1,450	1,383	1,333	1,289	1,212	1,172	1,188	1,173	1,221	1,160
中学校	岩川		501	751	816	773	736	674	728	696	639	608	557	507	485	442	415	390	370	347	350	393
	(笠木)		143	218	249	220	200	165														
	恒吉		270	373	358	355	357	329	297	246	201	175	168	142	142	117	106	97	86	82	68	51
	月野		291	420	435	419	384	357	300	236	214	209	210	197	163	128	129	115	118	100	104	87
	大隅北		153	222	260	241	262	269	253	200	167	158	136	112	93	86	80	72	60	66	59	50
	計		1,358	1,984	2,118	2,008	1,939	1,794	1,578	1,378	1,221	1,150	1,071	958	883	773	730	674	634	595	581	531
合計			5,802	6,231	6,088	5,568	5,171	4,556	3,954	3,358	2,914	2,743	2,521	2,341	2,216	2,063	1,942	1,846	1,822	1,768	1,802	1,781

大隅北中学校

町村合併により同一町内の二キロメートルしか離れていない位置に、岩川西（笠木）中学校折田分校と恒吉中学校坂元分校が存在することとなったので、これを合併しようとする気運が生じた。

位置と名称について紛糾し、位置は僅か百メートルくらいの移動まで問題になり、名称についてもなかなかまとまらなかったが、大隅町の北に位置するという事で、大隅北中学校と呼ぶこととして、昭和三十二年四月八日発足した。一年余は旧校舎で両方に分かれ授業を受けていたが、翌三十三年八月一日新校舎が竣工した。

大隅南小学校

昭和三十六年現在、町内に十二の小学校と五つの中学校がある。地形の関係もあるが、小規模校が分散し、しかも早急に改築を要する老朽危険校舎が多く、町の教育行政上の障害にもなっている。文部省でも少なくとも十二学級以上の規模でなければいけないと、強く学校統合を希望している。

町では桑之迫小学校（児童数二〇〇）と荒谷小学校（児童数一〇五）の学校統合を計画し、三十六年四月十二日桑之迫小学校で両校を統合する話合いをもった。当日は約百五十人の地区民が講堂に集まり、町長、議長を囲み論議した結果、統合賛成にまとまったが、位置の問題は後に残った。七月末、合併統合が内定したとき、折角合併するのであれば、距離の近い大谷及び恒吉校区の一部にも呼びかけたらとの意見もあり、両校区と話し合いも円満に解決、児童数約四百名、十二学級の小学校として発足することとなった。

名称は大隅南小学校と決め、敷地は桑之迫、荒谷両校と里脇地区のほぼ中央に当る県道上に十五ヘクタール買収した。

三十七年四月開校、一年間旧教場で授業、翌三十八年四月、鉄筋校舎落成を待って新校舎へ移転した。

大隅北小学校

坂元小学校と折田小学校は、町村が違っていたこともあって距離的に近かったが、この統合問題は老朽校舎の事もあって話し合いが続けられた。統合には賛成であったが、位置を中学校を挟んでどちらの側に造るかが問題となった。しかし敷地買収のこともあり、委員会一任の中で作業が続けられ、三十九年四月統合することとなっ

た。名称を大隅北小学校と決定したが、坂元小は九学級（児童数三三九）、折田小は六学級（児童数二〇八）で、児童数は五百人を越えることとなった。

校舎ができるまで、坂元教場、折田教場で授業し、四十年四月、鉄筋校舎竣工し、新校舎で授業を開始した。

恒吉小学校

適正規模の学校で充実した教育をとの行政面からの指導の中で、老朽校舎改築の問題も発生し、恒吉小学校・神牟礼小学校・須田木小学校・大谷小学校の四校を統合する案が町から提案された。須田木、大谷の両校は既に児童数が百人を割っており、統合についてはやむなしの声が多かったが、場所について紛糾した。特に恒吉は麓から上の台地に移転することに反対があったが、最終的に四地区の地理的中心ということで貝ヶ塚の西側の台地に決定、新しく恒吉小学校の名称のもとに昭和四十四年四月から二十三学級、児童数五〇五名で発足した。なお初年度はそれぞれ旧校舎で授業があった。

笠木中学校を岩川中学校へ統合

岩川西中学校の時代、二十三年四月から菅牟田の生徒達が岩川中学校へ校区を変更、三十二年三月岩川西中折田分校が廃止され、中学校統合の問題が発生した。これは小学校統合が一段落した四十四年ごろのことである。大隅北中学校と統合して八木塚あたりに校舎を新築したらという案も出たが、四十五年四月から岩川中学校と統合、笠木中学校は廃校となった。

第七節　学校の沿革

岩川小学校

天明四年軍治館設立。明治四年七月、都城県第四郷校創立。六年鹿児島県外城第五二郷校と改称。九年九月第四大学区第二十番中学岩川小学校となる。西南役のため十年二月から閉校、十一年十一月開校、十五年四月初等高等小学校、二十三年十月岩川尋常高等小学校併立岩川高等小学校、二十四年四月岩川高等尋常小学校となる。三十年六月岩川尋常高等小学校、大正六年四月岩川村立男子実業補習学校附設。十二年四月実業補習学校が岩川村立男子農業補習学校となる。十五年七月岩川青年訓練所設置。昭和三年岩川公民学校分立。九年十二月講堂新

築落成。十六年四月岩川国民学校となる。二十二年四月岩川小学校となる。二十四年十二月水道工事。二十七年ピアノ購入。三十年七月校歌制定。三十一年五月プール竣工、三十二年理科研究協力校指定。三十三年県理科センター指定。鉄筋校舎落成。三十四年新校舎落成。三十五年全国科学教育振興資金ソニー賞十万円受賞、三十六年ソニー賞五十万円受賞校長宇都重義教育功績者として文部大臣表彰、三十七年完全給食実施、上水道完成、三十八年十六ミリ映写機、四十一年鉄筋二階校舎改築、四十三年鉄筋校舎完成、四十六年創立百周年記念式典挙行、四十七年屋内体育館落成、五十年プール竣工、NHK全国音楽コンクール県大会優秀賞受賞、五十三年学校基本調査優秀校として文部大臣表彰、五十八年全国学校図書館協議会長賞受賞、五十九年親子読書全国表彰、六十年全国学校図書館コンクール（九州地区）文部大臣賞受賞、六十一年鉄筋校舎（八教室）新築

岩川小学校の理科教育

岩川小学校は昭和三十三年、県の理科センターの指定を受けてから、理科教育を中心に全教科の学力向上を目標として、職員全員とPTAが力を合わせて努力を続けた。PTAでは毎年夏休みになると、全員総出で職能別に仕事を分担、池作り、とり小屋作り、樹木の植えかえ、整地などに励み、校庭のスタンド、植物園、観察池、水生植物池、育苗園温床、小鳥、兎、鶏の家、メダカや蛙の飼育場、気象観測所を次々完成し、校内は見ちがえるように整備された。職員も夏休みは勿論土曜や勤務後の寸暇をさいて、「金のかからない設備」「効果的な実験器具の自作」に励み、自作教具は一千五百点を越え、子どもの夢を育てる科学センター、児童研究室、低学年と高学年用の掲示棚には児童の科学に対する芽ばえや研究心を育てる数々の器具や図表などが展示された。

岩川小ではこのように理科教育に努めていたが、全国多数の応募校の中から科学教育優秀校として選ばれた。

全国小中学校理科教育振興資金として昭和三十五年ソニー賞十万円を受賞し、三十六年には五十万円を受賞した。

歴代校長、永田碩蔵（明一一）、阿坂多一郎（明一三）、原田守造（明一五）、大田嘉之助（明一六）、川崎和夫（明一八）、牧之瀬良信（明二二）、肝付勇吉（明二三）、藤井道賀（明二七）、川上直信（明二九）、武田信清（明三二）、前田嘉吉（明四〇）、峰崎利親（明四二）、蓑田伊之助（大五）、

山下正志（大一〇）、中島善次（大一二）、篠田嘉吉（昭二）、山口卓二（昭四）、堀之内貞義（昭一〇）、神村武助（昭一三）、小坂時義（昭一六）、楠田重彦（昭一九）、池田四郎（昭二一）、町田辰巳（昭二五）、安庭貞士（昭二八）、宇都重義（昭三二）、二宮勇男（昭三八）、仮屋一雄（昭四一）、小園夙一（昭四七）、末川正文（昭四九）、蛭牟田三士（昭五二）、川路都夫（昭五六）、冨吉時治（昭五九）、立山春雄（昭六二）

笠木小学校

明治九年以前は、猫塚部落家塾時代（木場不動時代）塾主花牟礼八兵衛による寺子屋式教授が行われていた。明治九年木場小学校（下等小学科）戸長大津十七兼任校長、花牟礼八兵衛授業。明治二十一年簡易科小学校と改称（四年制）、二十五年九月笠木尋常小学校と改称。木場から笠木へ移転改築（現在地より北東百米の所）。二十九年女子尋常科四年制設置。三十六年笠木尋常高等小学校（高等科二年制）と改称。四十二年義務教育六ヶ年に延長。四十四年三月校舎移転改築（現在地）、大正六年四月補習科一年制を設置、七年校長住宅改築（校内）、十年四月笠木尋常高等小学校（高等科二年制併置）と改称、学制頒布五十年記念、岩川村教育功労者表彰式を本校で施行（鎌田郷右ェ門表彰）昭和七年奉安殿建立、十一年校庭拡張、十六年四月笠木国民学校と改称、二十年前校舎台風により倒壊、二十二年十月復旧、二十二年四月笠木小学校と改称、二十六年ピアノ購入、電話架設、三十年ミルク給食開始、三十五年校舎改築（鉄筋校舎）、校歌校章制定、三十六年鉄筋校舎新築、水道施設完備、三十七年完全給食実施、三十八年九州地区緑化コンクール受賞、県学校緑化最優秀校として表彰（県教委）、三十九年鼓笛隊編成、四十三年全日本学校緑化コンクール入賞、体育館落成、四十九年プール建設、五十年創立百周年記念行事挙行、五十二年笠木原水田水源地第一回遠行、五十四年九州地区ＰＴＡ連絡協議会よりＰＴＡ表彰、五十六年特別教室落成、五十八年ナイター施設設置。

歴代校長、肝付三（明三一）、鮫島雄吉（明三四）、越智鼎三（明三六）、山下文夫（明四五）、谷口喜一（大元）、鮫島雄吉（大三）、外山伝蔵（大三）、平川良信（大一二）、柿内兼吉（大一三）、谷川一雄（昭二）、蔵岡金之助（昭五）、杉村駿（昭一四）、中村登（昭一七）、黒木良行（昭一九）、宮田一（昭二一）、大保武夫（昭二四）、岩崎宗雄（昭二五）、有村光博（昭三一）、中馬三郎（昭三四）、末川正文（昭四六）、中村辰雄（昭四七）、峰崎昭美（昭五二）、八ヶ代正人（昭五八）、

小園保門（昭六二）、肥後義弘（平一）

菅牟田小学校

明治三年四月創立、一学級編制、二十五年十月菅牟田小学校と命名（三年制）、三十一年十月改築落成、三十二年四月（四年制）、四十一年四月（五年制）、四十二年四月（六年制）、大正三年二月校地移転、十一年十二月、三柱神社建立。昭和五年四月高等科併設、修業年限二年複式、六年二月御真影奉戴、三月校地拡張、十二年十一月奉安殿落成、十六年四月国民学校と改称。二十一年八月奉安殿撤去、二十二年四月小学校と改称、二十六年四月子供貯金組合発足、二十八年七月学校造林コンクール小学校部で第一位入賞、三十二年三月大丸学林地一町歩植林（杉、檜）、三十二年及び三十三年十月子供貯金組合大蔵大臣、日銀総裁から表彰、三十五年三月テレビ施設（岩崎与八郎寄贈）、三十六年十月井戸汲上式水道完成、ミルク給食室竣工、三十八年九月理科特別教室新設、三十九年簡易プール建設、校歌制定、四十年完全給食実施、四十四年鉄筋コンクリート二階新校舎竣工、五十年屋内体育館竣工、五十一年プール竣工、五十六年菅牟田剣道スポーツ少年団が優良団体として県表彰、完全複式学級編成

歴代校長、迫田才次郎（明三四）、田中勇次郎（明四一）、岩崎与蔵（明四四）、池之上正孝（大三）、谷村愛蔵（大一三）、浜田琢磨（昭二）、重信愛之助（昭八）、出田林一（昭一八）、大宮司実義（昭二〇）、飯牟礼実教（昭二一）、永吉利良（昭二六）、五反田正雄（昭二九）、徳永熊太郎（昭三七）、前畑清蔵（昭四二）、福島正巳（昭四七）、仮屋崎実（昭四九）、稲時成（昭五二）、東崎実男（昭五六）、下之園幸雄（昭五八）、中島信夫（昭六〇）、赤崎昭夫（昭六二）

折田小学校

明治二十五年三月迄は梶ヶ野にあり、梶ヶ野簡易科小学校と称す。二十五年四月折田簡易科小学校設立、二十七年七月折田尋常小学校、大正十四年四月二十日新校舎落成、昭和三年三月三十一日折田尋常高等小学校、十二年十一月運動場拡張、十六年四月一日折田国民学校と改称、二十六年四月一日揚水ポンプ設置、二十七年ピアノ拡声器購入、二十九年養護婦設置、三十七、三十八年度貯蓄関係で大蔵大臣賞を受く。三十九年四月一日大隅北小学校発足により合併。

歴代校長、川崎才蔵、鮫島雄吉、岩崎宗五郎、馬場岩熊（明四二）、谷村愛蔵（明四四）、平瀬武蔵（大六）、本田照吉（大七）、岩松城之助（大八）、小浜浩（昭二）、平川良信（昭一二）、松下多（昭一五）、青山豊（昭一八）、重信愛之助（昭二一）、溝口早苗（昭二三）、藤重敞治（昭二六）、宮路涼（昭三〇）、宮原篤（昭三三）、渡辺清俊（昭三六）、孝子幸平（昭三八）

恒吉小学校

明治五年九月恒吉第二十一郷校として創立（都城県管轄）、六年一月鹿児島県管轄となり、恒吉第五十四郷校と改称。十年西南役のため一時廃校、十三年学科を改め、初、中、高の三等に分けて復活。十九年小学校令に基づき尋常科並びに補習科をおく。二十年校舎を建て、普く就学児童を収容し、小田勲初代校長を迎える。二十三年二月九日百引、市成、恒吉三ヶ村の青年討論会を本校で行う。二十六年尋常小学校に指定され、別に修業年限三ヶ年の尋常補習科を置く。二十九年本県では未就学が厳禁される。三十年五月八日より四日間鹿児島方面に修学旅行、参加児四十三名、旅費一人五十銭。三十一年五月十日県知事加納久宜来校。三十三年一月職員児童で蓄音機を寄付。八月義務教育四ヶ年の小学校令発布、同年校舎改築す。年末郡内教育品展覧会を本校で開催。三十四年六月補習科を正式に高等科として認可。三十五年春喰袋学林地に植林、同二月父兄懇談会、児童演説会を父兄約三百人来校のもとに盛大に行う。

三十八年三月強風中修学旅行、敷根村民の尽力によって危機を救われ、三十センチ程の積雪を突破し、全員無事帰校す。四十一年四月小学校令改正のため尋常小学校の修業年限六ヶ年となる。同十月冀北教育大運動会を貝塚段にて挙行、参加校は牛根境校、百引校、高隈校、市成校、恒吉校の各校。大正三年、桜島大噴火により、大谷、須田木尋常小学校村財政欠乏のため、当校の分教場となる。五年四月村立実業補習学校開かる。六年郡連合運動会志布志中で開かれ尋常五年以上参加する。七年流行性感冒のため十一月六日から十五日間閉校す。十四年三月二十五日長江部落大火にあうも学校は無事。十五年から昭和二年始めまで校庭拡張工事。昭和三年大谷尋常小学校独立す。同三月横穴井戸を掘さく、飲料水の確保をなす。十三年校舎総改築、落成式盛大に挙行、十六年恒吉国民学校と改称。十九年長江部落大火にあい、村役場類焼、本校農業準備室に仮事務所おかる。二十二年末、恒吉小学校と改称。二十四年神牟礼分教場設置さる。二

十七年放送施設ＰＴＡの協力により完備（約九万円）。二十八年父兄負担教育費調査の協力により文部省より表彰。三十年ＰＴＡ立幼児学級開設。三十二年校歌制定。三十五年秋よりミルク給食開始。三十六年九月ＰＴＡの協力でテレビ購入。三十七年理科振興法を受け第二回目の理科器具整備。三十八年四月宮原部落の児童校区変更、南小へ転校。三十九年二月チャイムタイマーを校内に設置（寄贈）、四十年給食室完成、六月十日から完全給食開始。ＰＴＡから鼓笛隊楽器寄贈。四十四年恒吉、神牟礼、須田木、大谷の四小学校統合し、新しく恒吉小学校が二十三学級、児童数五〇五名で発足した。五十七年県学校緑化コンクール知事賞受賞、夜間照明施設の設置、五十八年緑の少年団結成、五十九年全国植樹祭で学校環境緑化に対し感謝状を受く。六十一年県学校造林オンクールで知事賞受賞。六十一年の児童数九十六名。

歴代校長、小田勲（明二〇）、曽山伝作（明二二）、伊地知隆鴻（明二五）、万福直清（明二七）、平良末次郎（明二九）、植村長胤（明三一）、増利慶次郎（明三六）、川添七次郎（四二）、山下文夫（明四四）、小原伊太志（明四五）、中村平介（大五）、片野坂重二（大七）、蔵岡金之助（大一〇）、谷川一夫（昭五）、伊藤祐晴（昭一四）、小脇篤志（昭一七）、最勝寺俊信（昭一九）、川畑泰造（昭二四）、山口健吉（昭二六）、岩下三次郎（昭二九）、町田実備（昭三四）、黒坪静夫（昭三七）、福留哲雄（昭四二）、河原角男（昭四四）、有川冨夫（昭四七）、山田貞春（昭五〇）、中村貢（昭五四）、橋口兼二（昭五七）、有馬求（昭六三）

坂元小学校

明治二年藩政時代のお仮屋跡に、士族の仁才を訓練する剣術所又は寺子屋的なものができた。教師は伊集院十郎で年米四石を支給され、別に田畑をかりて、仕事は弟子の人達が加勢した。明治五年十月学制発布にともない素朴な学校創立。十年西南役で授業を休む。十一年学制改正と校舎改築を期して、校舎を宮岡に移転。十二年坂元小学と称す、二十年坂元簡易科小学校と改称。二十五年坂元尋常小学校と改称、三十年一月大隅町立坂元小学校と改称、三十二年四月弟が平の新校舎で授業、三十五年坂元尋常高等小学校と改称。四十一年義務教育延長で、従来の高一を尋五、高二を尋六とした。四十三年高等科廃止、大正十二年高等科再置、坂元尋常高等小学校と改称。十五年四月現在位置に新校舎完成、十六年四月坂元国民学校と改称、二十二年五月坂元小学校と改称、三十五年十月創立八十八周年記念行事を行い、各種の事

業実施、三十九年四月大隅北小学校発足により合併。

歴代校長〈○印責任者、其外は校長〉
○伊集院十郎（明二）、○勝目政隆（明七）、○宮路恵助（明八）、○中原厳（西南役後）、○川村喜之丞（明一五）、○奴久妻兼修（明一七）、○川崎祐利（明二二）、福島重徳（明二四）、○園田亀助（明二六）、三島享（明二七）、前田嘉太郎（明三二）、小林愛蔵（明三四）、上室喜之助（明三七）、有川貞信（明三九）、前原盛二（明四三）、柿内善雄（大九）、川路助次郎（大一一）、杉村駿（昭五）、村川英輔（昭一四）、小浜浩（昭一八）、池畑守夫（昭一九）、長浜篤行（昭二二）、飯牟礼実教（昭二六）、有満重芳（昭二八）、広山一夫（昭三六）

大谷小学校

明治八年十一月創立大谷小学校と称す。二十年四月学令改正により大谷簡易科小学と改称。二十五年四月大谷尋常小学校と改称、修業年限三ヶ年。三十三年五月、四年制。三十四年五月十六日校舎改築。四十一年四月、六年制。大正三年四月恒吉尋常小学校に併合、大谷分教場と称す。昭和三年四月独立し、大谷尋常小学校と改称す。十一年九月校舎改築起工、十二年六月新校舎竣工。十六年四月大谷国民学校と改称す。二十年四月高等科併設。二十二年四月大谷小学校と改称。二十五年十一月放送の施設。二十六年五月校庭拡張、二十九年十一月ピアノ購入、ベル設置、三十年五月井戸動力ポンプ設置、六月拡声器購入、三十五年十二月ミルク給食実施、三十八年四月一日炭床、里脇、小松、小山の四部落大隅町立南小学校に統合。（児童六九名）、四十年十一月理振法補助十万円を受く。四十二年一月テレビ購入。四十四年三月恒吉小学校と統合のため閉校

歴代校長、伊地知隆鴻（明治二五）、花牟礼助左衛門（明三七）、赤松計佐七（明四一）、遠矢長（明四五）、轟木治幸（大正元）、〈この間分教場〉蓑田利次（昭和三）、河野千冬（昭九）、池田琢磨（昭二一）、田尻則（昭二三）、西宮重則（昭二五）、柿内重徳（昭二九）、榊原儀徳（昭三二）、鈴木重徳（昭三八）、上平田英海（昭四一）

須田木小学校

明治十一年創立須田木簡易科と称す。二五年四月須田木尋常小学校と改称、三十三年四月第四学年設置、三十四年十一月校舎改築、四十年四月義務教育六ヶ年に延長、大正三年三月恒吉小学校の分教場となる、（昭和五

年まで十六年間)、昭和五年三月独立、須田木尋常小学校、十六年四月須田木国民学校と改称、二十二年四月須田木小学校と改称、三十年九月増築、三十一年二月増築、三十一年四月運動場拡張、三十二年十月電話架設、三十三年三月熊本郵便局貯金部長からこども郵便局に感謝状、同五月文部省県指定研定協力校となる。三十六年六月テレビジョン設置、郡国語算数研究協力校となる。五月熊本郵政局長からこども郵便局の表彰状を受く。三十八年四月完全なる六学級単式となる。三十八年六月二教室増築、四十年郡中部地区僻地教育研究会、校歌制定、四十一年二月完全給食始まる、四十四年三月恒吉小学校と統合のため閉校

歴代校長、長浜仲太郎(明治三四)、迫田袈裟太郎(明三九)、轟木治幸(明四三)、赤松計佐七(明四五)、〈この間分教場〉有田熊二(昭五)、南条健吉(昭一二)、中丸兼二(昭一八)、大久保武夫(昭二〇)、橋口芳文(昭二四)、栗山盛喜(昭二七)、森田武勝(昭三六)、福島末治(昭三九)、石川勇男(昭四二)

神牟礼小学校

昭和二十四年四月、恒吉小学校神牟礼分教場として発足。(四学年四学級)、二十五年四月、恒吉小、神牟礼分校に昇格。二十七年四月、神牟礼小学校に昇格、三十年一月、大隅町立神牟礼小学校と改称。三十一年二月、第二次校舎八二、五坪完成、三十四年一月、第三次校舎講堂兼用落成、昭和三十七年六月電気配線工事完、工拡声機購入、三十八年四月ベルタイマー購入、六月第二次理振適用、三十九年七月ミュージックチャイム取付、四十年六月第三次理振適用、四十一年十月給食室完成、十一月完全給食実施。四十四年三月恒吉小学校と統合のため閉校

歴代校長、分教場主任青山茂(昭二四)分校主任青山茂(昭二五)、校長松尾鉄雄(昭二七)、三浦安雄(昭三一)、有馬大次郎(昭三五)、渡口一葉(昭三八)、小牧伊吉(昭四三)

月野小学校

明治五年十月学制により郷校の外分校十一創設、明治七年四月下岡小学創立。茅葺屋根十六坪、竹床、莚敷、宮崎県第十一区第一区三十五番小学と称す。明治七年から十二年迄上等下等小学と称す。九年十月上等下等小学校教則実施により、各分校独立して、月野は第五大学区

宮崎県第二十七中学区第三十一番月野小学と称す。九年七月十三日下等小学第八級卒業証による。同年十二月三十日下等小学第七級証書には鹿児島管下第二十七中学区第三十一番月野小学と記してある。明治十二年から十九年迄初等中等上等小学と称す、同十九年から二十四年迄尋常科、二十年四月小学校令実施により尋常高等小学校と簡易科とに分かつ、二十四年十二月月野村独立、二十六年頃尋常小学校補習科を併置す。三十四年月野尋常高等小学校と改称す、四十四年教育召集の制を設く、小学校卒業の青年男女を適齢満二十歳迄年に数回補習教育をなす、大正四年村及び月野校、桑迫校、御即位大典の記念造林をなす、大正時代不明、昭和十年講堂及び木造二階校舎増築、十六年四月月野国民学校と改称、二十二年四月月野小学校と改称、この後PTA発足三十年三月学校林設定（一町四反）、三十一年十月ミルク給食開始、三十二年八月ピアノ購入、三十六年三月鉄筋校舎落成、三十六年十二月完全給食実施、四十年八月校庭拡張、十月創立九十周年記念行事、四十二年三月温室、植物園完成、四十七年三月屋内体育館落成、四十八年プール竣工、創立百周年記念式典、四十九年特別校舎完成、六十一年月野小学校文化財愛護少年団結成

歴代校長、谷口直吉、松本彦四郎、勝目某、今井清康（明治一七）、八木重材（明一九）、久保正之助（明二〇）、野辺貞吉（明二一）、中島惟重（明二三）、永田綱吉郎（明二五）、堀中千秋（明二七）、門田義紀（明三〇）、野田東之丞（明三五）、大磯鉄熊（明三九）、蓑田伊之助（明四二）、有川貞信（大正五）、川崎武二（大正七）、赤崎直弥（大正一〇）、藤屋一郎（大正一三）、鶴留藤右衛門（昭三）、遠藤常美（昭四）、高宮豊盛（昭六）、蛭川武義（昭一〇）、伊作清徳（昭一六）、山口静哉（昭二一）、福田操（昭二二）、竹下政武（昭二四）、最勝寺俊信（昭二七）、原田惟行（昭二八）、浜田万二（昭三六）、白尾春樹（昭四〇）、原田利教（昭四五）、南栄（昭五〇）、上村清光（昭五五）、別当法道（昭五九）、稲留明（昭六一）、酒匂満（平一）

桑之迫小学校

明治十九年四月六日創立桑之迫部落桑原伝兵衛方間借で開校、二十一年八月校舎建築、桑之迫簡易小学校と称す、三十五年十二月校舎改築、大正十三年十一月校舎移転改築、昭和八年十二月校舎増築（講堂兼用）、十六年四月一日桑之迫国民学校と改称。十八年四月一日高等科併置、二十二年四月一日桑之迫小学校と改称。二十七年十月講堂新築、三十四年二月ピアノ購入、三十五年十一月ミルク給食施設、三十七年四月統合により大隅南小学校

桑之迫教場（一年間）となる

歴代校長　藤屋甚兵衛（教師明治一九頃）、二見安二（校長明三三）、井上計佐七（明三五）、二見安二（明三五、一二）、吉国伯弥（大二）、本田種蔵（大六）、伊集院勇（大一四）、松元兼二（昭三）、田実美成（昭六）、前田秀義（昭一〇）、松下鉄太郎（昭二〇）、平原清秀（昭二二）、福岡精蔵（昭二七）、八木国吉（昭三〇）、山元義明（昭三六）

荒谷小学校

明治七年二月野方村字荒谷小学校創立、二十一年一月水之谷簡易科小学校と改称、二十五年十月大迫に移転し、荒谷尋常小学校と改称、三十四年四月小学校令改正第四学年まで増設、四十二年四月第六学年まで延長、大正二年四月野方小学校の分教場となる。昭和十六年四月国民学校令実施と共に独立し、荒谷国民学校と改称。二十二年四月荒谷小学校と改称。三十年八月養護婦配置、三十三年一月公衆電話架設、三十五年八月テレビ受贈（岩崎与八郎）、三十七年四月統合により大隅南小学校荒谷教場（一年間）となる。

歴代校長　篠田政興（明七）、重富住英（明三四）、久富木勝次（明三四）、柿内善雄（分教場主任大二）、坂元甚左衛門（同大七）、森山郷左衛門（同大九）、吉国新次郎（同大一〇）、本田種蔵（同大一五）、柿内善雄（同昭三）、満永盛吉（同昭五）、崎田登（同昭一二）、川南篤（同昭一三）、岩崎実（同昭一四）、今井利良（校長昭一六）、小松清大（昭一七）、牧豊吉（昭一八）、本村英二（昭二一）、立元為明（昭二三）、浜崎誠一（昭二四）、枦山文次（昭二六）、小崎実義（昭二七）、榊原儀徳（昭二九）、松方敏博（昭三二）、徳留次男（昭三六）

大隅南小学校

昭和三十七年四月開校（桑之迫、荒谷教場に分かれて）三十八年三月桑之迫、荒谷教場閉校、四月新校舎へ移転授業開始（大谷小の四部落、恒吉小の一部落を統合）、六月鉄筋校舎落成、三十九年二月校庭の植樹（PTA奉仕作業）、三月校地内に校区公民館落成、四十年四月体育館落成、四十一年十月給食室落成、十一月完全給食開始。四十二年十月校歌制定、四十四年十月水道施設完備、四十九年十月プール完成、六十三年体育館落成、創立二十五周年記念式典。

歴代校長　山元義明（昭三七）、末川正文（昭四〇）、鮫島逸郎（昭四四）、諏訪脇賢（昭四九）、小杉洋（昭五二）、武満秀郎（昭五七）、永田淳久（昭六〇）、谷山季男（昭六二）

大隅北小学校

昭和三十九年四月大隅北小学校創設、当分坂元教場（一二学級）、折田教場（六学級）で授業、四十年四月鉄筋校舎完成、両教場を解消して、本校に移転完了、大隅北小学校ＰＴＡ発足、四十一年三月特別教室、体育館完成、四十一年十月給食室竣工、十一月完全給食実施。四十三年校歌制定、四十八年八月北小中共有プール竣工、十月校旗制定、四十九年三月統合十周年記念式典、五月剣道スポーツ少年団結成、五十八年六月ビデオ一式購入、校内放送スタジオ設置。

歴代校長　能見義武（昭三九）、鳴海勇夫（昭四二）、前田薩男（昭四八）、前田康雄（昭五〇）、野村一丸（昭五三）、大坪寛（昭五七）、羽生知章（昭五八）、宮原照美（昭六一）、新名正治（昭六三）

岩川中学校

昭和二十二年五月二日岩川小学校講堂で開校式、七月三十一日後援会設立、（後ＰＴＡに改む）、二十五年六月十一日校舎第一期工事竣工、二十六年七月十一日第二期工事竣工、二十六年六月三十日ピアノ購入、九月十五日第三期工事竣工、十一月三日施設優良校として文部大臣表彰を受く、二十七年五月十日第四期工事竣工、八月二十八日水道施設完成、二十八年六月一日講堂落成、三十八年十月二十八日完全給食開始、四十年三月十五日校旗制定、十月県学体連サッカー中学校の部優勝、四十一年三月二十七日剣道部三戸市における全日本剣道練成大会に参加第三位となる。三年生日高は個人全国優勝、四十五年四月笠木中学校を統合、四十九年三階建校舎落成、五十三年体育館落成、四十三年全国剣道大会優勝、その後たびたび県や全国大会で優勝。

歴代校長　山口静哉（昭二二）、大村熊吉（昭三〇）、飯島栄二（昭三六）、園田義美（昭四〇）、青山光雄（昭四三）、鈴春雄（昭四六）、的場邦人（昭四八）、満尾醸二（昭五一）、上坪茂（昭五三）、加世田実（昭五五）、中村満（昭五九）、岩切則夫（昭六一）、豊丸勝世（平一）

笠木中学校（岩川西中学校）

昭和二十二年四月一日岩川西中学校創立認可、笠木

小、折田小、菅牟田小区の一部を本校区とし、折田教場を設く五月二日開校式を笠木小で挙ぐ、本校は笠木小の校舎の一部折田教場は折田小の校舎一部を借用授業を始む、十二月一日学校後援会設立、二十三年三月二十五日PTA発足、三月三十一日折田分校設立認可、四月一日菅牟田校区は岩川中学校区に変更、二十五年六月十一日第一期校舎建築竣工、二十六年三月九日第二期校舎建築並びに運動場整地竣工、六月十八日郡校長研究会開く、八月三十日ピアノ着荷、二十七年三月二十八日電話架設、四月二十一日青年学級発足、二十九年七月二日町教委主催教科（理科）研究会、三十年一月学林地柳俣不動認可、三十二年三月三十一日折田分校廃止され、新設大隅北中学校区となる、四月一日笠木中学校と校名変更、十月一日校歌、校章制定、二月十五日県緑化推進委から夏山手入れ優秀のため表彰、三十八年十月二十一日郡内教育長学校視察、三十九年一月十五日町内柔道大会優勝、三十九年十月一日テレビ取付（PTA寄附）、四十年一月十五日町柔道大会優勝、四十一年一月二十三日町柔道大会優勝、四十二年一月十四日町中学校柔道大会優勝、二月一日完全給食開始、四十五年三月岩川中学校へ統合のため閉校。

歴代校長　佐々木高盛（昭二二）、西元早七（昭二九）、今別府良春（昭三五）、久保薗一男（昭三八）、永井稔（昭四二）

恒吉中学校

昭和二十二年四月一日恒吉中学校、同坂元分校の設置認可。五月二日恒吉小学校で入学式挙行、七月十八日PTA発会式。二十六年八月二十八日校舎竣工、九月一日新校舎に移転。二十七年二月十一日ピアノ購入、第二期工事竣工、三十年一月大隅町立恒吉中学校となる、三十一年九月三十日校歌、校旗制定、三十一年十二月三十日無動力による揚水ポンプ完備、三十六年四月十日動力揚水ポンプ完成、三十八年十一月十五日テレビ寄贈（後藤祐之）、十一月十六日講堂竣工。五十二年三月新校舎落成、五十三年屋内体育館落成。

歴代校長　長野秀雄（昭二二）、宮原諭（昭二五）、永田行秀（昭二九）、大園重盛（昭三七）亀山魁（昭四三）前田薩男（昭四五）、松元善宜（昭四八）、大館義徳（昭五一）、戸沢一郎（昭五三）、松下正人（昭五七）、弥栄忠（昭六一）、有馬駿一郎（昭六三）

大隅北中学校

昭和三十二年四月八日、大隅北中学校創立、折田、坂元両分校合併して独立、三十三年八月一日新築鉄筋校舎竣工、九月一日新校舎で授業開始。九月二十七日落成式、三十四年十二月二十日テレビ購入、三十七年三月十五日創立五周年祝賀式、三十八年七月十八日校歌制定、三十八年九月二十日電話架設。四十三年屋内体育館落成、五十二年校旗制定。

歴代校長　益満武雄（昭三二）、原田政義（昭三三）、出口信雄（昭三七）、山下義雄（昭四一）、有馬文喜（昭四四）、山口武雄（昭四八）、加納満矩（昭和五一）、岡山三男（昭五四）、有馬功（昭五八）、堀口次男（昭六一）、木佐木康正（平一）

月野中学校

昭和二十二年五月二日月野中学校創立、九月八日父母と先生の会生まれる。二十三年三月十七日青年学校閉校に伴い諸物件を引き継ぐ、二十四年五月六日新校舎落成式挙行、習七日新校舎に移転、二十五年五月三十日中学校講堂兼月野公民館竣工、二十六年一月二十七日水道工事完了、給水設備整う、九月二十四日放送設備工事施工、二十七年十二月二十五日電話架設、二十八年三月三十日講堂新築落成完工式、十二月十七日ピアノ購入、三十年八月二十八日県陸上競技大会にて、津田束走巾跳に新記録樹立、（九州で第一位、全国で第七位となる）、併せて三段跳も県で優勝。三十一年十月三十一日学校に少年消防隊をつくり町から腕用ポンプ一式を受く、三十四年五月一日気象観測台施設完成、三十五年一月二十日ミルク給食（D型）実施、一月三十日給食室竣工、三十六年四月十三日月野小、中学校共用水道完成、四月二十七日県産業教育指定校として三十万円補助を受く、三十八年十月十三日テレビ月野農協から寄贈、三十九年五月二十七日集団赤痢のため全校生徒本日から臨時休校、六月十九日授業再開、七月十日第二運動場竣工式（自衛隊施設隊引きあげ）、十二月二十一日校旗推戴入魂式、四十一年九月五日給食室竣工、十月二十四日完全給食実施。四十四年三月家庭科教室竣工、四十七年小中プール建設、五十三年三月校舎落成、五十四年二月体育館落成。

歴代校長　山元忠（昭二二）、有村光博（昭二四）、岩崎宗雄（昭三一）、赤窄進（昭四一）、有田春男（昭四六）、吉留

辰雄（昭四八）、春成文夫（昭五一）、山元康照（昭五四）、牛根鉄夫（昭五八）、高田重利（昭六一）、桜井知明（平一）

岩川高等学校

昭和十六年三月三十一日鹿児島県岩川工業学校認可、六月十日入学式挙行、岩川青年学校で授業開始、十八年四月十三日新校舎へ移転、十九年四月一日鹿児島県立岩川工業学校と改称（県立移管）、二十一年十月一日建築科二部設置、二十三年四月一日鹿児島県立岩川高等学校に移行、同時に普通科一学級設置、二十四年三月三十一日建築科二部廃止、二十五年四月一日普通科二学級に増加、二十六年十一月二十四日創立十周年記念式典挙行、二十九年十一月図書館竣工（岩崎与八郎寄贈）、三十五年三月二十日水道施設落成、三十七年四月一日普通科一学級減、化学科一学級増、電気科一学級、機械科二学級増設、七月三十一日新本館鉄筋三階教室第一期工事完了、三十八年一月三十一日同二期工事完了、二月十日鉄筋三階建三教室完成、三月三十日寄宿舎完成、四月一日普通科一年一学級増（臨時）三十九年四月一日普通科一年一学級増（臨時措置）、電気科一年一学級増、六月三十日鉄筋四階建十二教室完了、四十五年六月屋内体育館完成、十月プール完成、四十六年十一月創立三十周年記念式典挙行、五十六年四月第二グランド完成、六十一年一月寄宿舎全焼につき六十二年三月寄宿舎再建。

歴代校長　神崎栄一郎（昭一六）、嘉村哲夫（昭二三）、砂川恵路（昭二七）、中野仲之助（昭三〇）、上野規矩夫（昭三四）、原口時雄（昭三八）、村山兼昭（昭四一）白坂文夫（昭四三）、犀川碇吉（昭四五）、東良一（昭四七）、山口富士（昭四九）、淵脇正男（昭五二）、笠毛邦彦（昭五五）、浜田融弘（昭五八）、児島隼彦（昭六〇）、橋口輝英（昭六二）、内田登（平一）

第八節　社会教育

一　社会教育行政

大正八年、文部省に通俗教育の専任事務官がおかれ、各県に社会教育主事をおくこととなり、十年三月、本県でもおいた。また同時に嚮於郡にも同様の職員をおいた。

昭和二十年、文部省に社会教育局が設置され、翌年地

方の自発的気運を背景に、社会教育施設の中心的役割を果たす公民館設置に関する文部次官通達が出された。

二十四年六月、社会教育法が制定され、社会教育に関する国及び地方公共団体の任務を明らかにし、国民の自由な学習を保障したが、この中で公民館設置が法制化された。

公民館は市町村や区域内住民の生活文化の振興と社会福祉の増進に寄与することを目的としている。

また社会教育委員や社会教育主事を置くこととされた。

恒吉村の公民館活動

松田琢巳は恒吉村議会議員で教育委員長をしていたが、村長から請われて昭和二十六年八月、公民館主事に就任し公民館活動に取り組んだ。

組織は村公民館の下に各校区公民館（館長は小学校長）をおき、その下に部落公民館をおいた。

部落公民館の館長は、各部落の駐在員をもって当てたが、部落民を指導するようなことはできないという駐在員からの反対も一部にあったが、押し切って実施した。

村の公民館には松田主事と係一名がいたが、その後、女子職員も一名増となった。公民館は恒吉小学校（現在の校区公民館）内に設けられた。公民館設置条例をつくり、それによって運営したが、審議会は委員十名くらいで年数回開会した。

公民館活動の中で、発足するとすぐ公民館結婚式を始めたが、これは生活合理化の一環でもあった。しかし公民館活動は主として青年団婦人会の活動を活発にし、人間関係をつくってゆくことに努めた。部落では青年は毎月定例会を開いたが、多くは早起き会で早朝に開いた。婦人会は夜定例会を開いたが、松田は各会に出席し、指導助言を行ってきたので帰りはたいてい夜十二時ごろになった。

二　町村合併後の社会教育

大隅町合併後は、岩川、恒吉、月野各町村公民館は統合した。当時、教育委員会事務局は光美堂の左前にあった二階建の木造建物であったが、内部を改造して学校教育と社会教育の二課を置いた。

教育長は町田辰巳、学校教育課長は野上田功、社会教育課長は最勝寺俊信であった。社会教育主事は松田琢

巳、本田徳芳、山田達夫の三人であった。

当時、部落公民館のよく出来ていたのは月野で、その次が恒吉であった。岩川は部落公民館は少なかった。

社会教育としては、民主団体の育成強化に努め、部落公民館の育成、部落づくりを一番重点においた。部落の人間関係をよくし、生産の向上を図ることを主張した。

各校区内にモデル部落を選定し、公民館運営を活発化し機能発揮できる部落育成に意を尽した。

ナトコと呼ばれた巡回映画による視聴覚教育が、社会教育の大きな比重を占めていたのは終戦後から昭和三十七、八年頃までである。連合軍総司令部が貸与した一六㎜映写機は各郡の教育事務所にあり、フィルムが廻ってくるたびに当時郡の社会教育主事であった三坂三郎は郡内町村を毎晩のように巡回映写していた。これをナトコ映画といっていた。

婦人学級も婦人会活動の一環として料理講習など盛んに行われたものである。

指導体制として社会教育主事の他に、昭和四十三年から社会教育指導員をおくこととなった。また五十一年から派遣社会教育主事制度を設けた。

諮問機関としての社会教育委員は小学校、中学校、高校の校長代表各一名、校区公民館長七名、町ＰＴＡ連絡協議会長、町婦人会長、町青年団長、学識経験者三名の計一六名で構成され、委員は公民館運営審議会委員を兼ねている。

三　社会教育活動

生涯教育活動は各機関、団体と連携を密にしながら幅広く時代に即応した取組みが行なわれているが主なものについて記す。

婦人学級

校区毎に定例的に開催しているが、内容も保健や越味的ものなど多様化してきた。働く婦人がふえてきて婦人会員が減少傾向にあるが、今後の対応は難かしくなる。

青年学級

地域振興、仲間づくりを主な目標として実施してきたが婦人会と同じく青年団員の減少が目立ってきた。これも今後の課題である。

高齢者学級

老人クラブと連携しながら、生甲斐のための学級を開いている。中央に高齢者学級を開く他、岩川地区を主体としたやごろう学級、恒吉地区のにちりん学級、目野地区のわかまつ学級などで健康教育や趣味その他の学級を開く。

家庭教育学級

幼児や小中学校のこどもを持つ親に自覚を持たせ、健全なこども達を育成するため保育園等の幼児施設や小中学校に家庭学級を開設している。

青少年育成

こども会研修は主として夏休みを利用するが、夏休みのこども会宿泊研修は昭和四十六年から実施しているが、六十二年から大隅町少年の船と名付けて中種子町との交流をすすめている。

高校生を対象としたワークキャンプは五十年に始めたが、二三年で中止した。

こども会などの育成団体として五十一年にこども会育成連絡協議会や、六十三年に青少年育成町民会議を設置した。

企業内教育

働く人々にとって研修の機会が少ないので、六十二年から企業内教育を実施している。

P　T　A

部落PTAや学級PTAの実践活動を推進する他、PTA研究公開や講習会など実施している。

公民館講座

中央公民館や地区公民館等の施設を利用して公民館講座が開設されたのは四十八年からである。当初は生活教室的な形で料理教室など一三講座位であったが、その後一般教養的なもの趣味などひろがりをみせ、絵、書、踊、華道など平成元年現在一八講座を有する。期間は一年であるが、その後も自主的に同好会など結成グループ活動をしているものも多い。

明るく住みよい町づくり運動

町民自らの手で町づくりをする運動は以前から機関や

団体の中であったが、これを恒常的に定着させるため全国や県の施策に呼応し、または単独の施策を実施している。昭和四十五年全国の小さな親切運動に呼応し小さな善行を毎年表彰する他、ネパールの結核予防活動に参加、古切手を一九万枚位集めて贈った。また四十七年町民憲章、町花、町木の制定を行った。また同年国民体育大会が県内で実施されたのを機に花一杯運動としてカンナを道路に植えたが、その後毎年町で花苗を作り、学校や社会教育団体に配布している。

からいも交流

内之浦出身の加藤憲一は昭和五十六年、南方圏交流センターを設立、農家、漁家、商家など庶民層による草の根交流を計画した。翌年から外国の留学生を二週間の日程で県内の受入先にホームスティさせたがこれをからいも交流と呼んだ。

大隅町では第三回から受け入れたが最初は八名の受入れでその後毎年受入れている。

視聴覚教育

町で一六㎜映写機を購入したのは昭和三十三年四月である。最新型でナトコ映写機より明るく音声もいいと町報で広報しているが、以後、毎月各校区を巡回上映することとした。公民館巡回映画と呼んだが、ニュースと他に二本位上映している。これはナトコ映画とある期間平行して実施されているようである。

中央公民館が新築されたのに伴い、四十三年に三五㎜映写機が備えられた。五十一年になると曽於地区視聴覚ライブラリーが発足し、事務局が町中央公民館におかれ

からいも交流
（椎茸栽培見学）

たが、これを契機に視聴覚教育が一段と推進されることとなった。五十三年から視聴覚教育指導者（初級）研修会を、また一時中断していた一六㎜映写機操作研修会も五十八年度から実施している。

五十五年郷土館が開館したので視聴覚室はこの中に併置された。また五十九年町文化会館が開館したが、ここにも一六㎜映写機が備えられ映画会などに利用されている。

視聴覚室の機材は平成元年現在、一六㎜映写機、ビデオカメラ、ビデオカセットコーダー、ミキサー、自動編集コントローラー、スライドオートプロセッサー、テレビなどが取り揃えられている。

図書活動

昭和二十四年当時、岩川町の図書室には約一、五〇〇冊の図書があった。町村合併後の三十三年には二、四四三冊、四十二年三月は四、二七四冊、五十年四、九四〇冊、五十五年一二、一三〇冊、五十八年一六、二二四冊、六十三年二二、五七七冊を有している。（何れも年度末）

図書室は合併時は中礼商店のスタンドの所にあった教育委員会にあったが、中央公民館ができてからはそこへ移り、郷土館開館に伴い郷土館内の図書室に移った。

図書の利用状況については利用人員と貸出冊数で分かるが、四十年度三五九七名（四七五五冊）、五十年度三、九八八名（六七六八冊）、五十五年度五、四二二名（九、八四一冊）五十八年度六、一二〇名（一一、〇九六冊）六十三年度九、五三八名（一三、七九一冊）となっている。

館内での閲覧、貸出、レファレンスサービス（参考業務）などの外、巡回文庫、貸出文庫（保育所八か所、役場支所三か所、福祉センター）を実施している。

図書は篤志家の献本も多く、六十三年度だけで九二四冊の寄贈があり、六十三年度末までの累計は四八四五冊である。六十二年十一月には死去した坂口町長の遺族からも献本を受けたので坂口文庫と名付けた。

四　社会教育団体

青年団（会）

青少年の教育については藩制時代から薩摩藩独特の郷中教育があった。明治初期の土成、縫之園（にのそん）方限の郷中属則によって当時の一端がうかがわれる。なお縫之園は吉

井部落の前身である。

明治六年四月　　十成方限
　　縫之園方限

郷中属則

一　弐拾弐歳迄者妻対無用（註―対は帯）
一　拾五歳より弐拾弐歳迄歌三味線等相囃子場所江立障間敷候尤酒焼酎分限ニ不過様可相嗜事
一　拾五歳より弐拾弐歳迄之間万一女色之咄いたし或ハ歌三味線等相囃子場所江立障亦ハ酒焼酎分限ニ過シ終ニハ至犯嬉乱を者ハ二才中一同面責いたし吟味之上速ニ至当之所置可致也
一　弐拾弐歳を過し妻対之節ハ親兄或ハ親類等より二才頭取方へ何某の媒妁ニてもらひ請候ニ付此節妻対可為致段可申出候若右様無之候て陰ニ取計候人ハ二才中吟味之上至当之科料可申付候事
但密々ニ取計候事露顕いたし候節ハ双方親兄の越度ニ候ニ付則双方親類等よ里離別為致候上婦女子渡ハ親類等より厳重ニ取締可致候事
右之通此節属則相究候ニ付永世厳重に相守二才頭中より時々無怠致取締万属則ニ相肖候人於有之ハ二才頭取江申出吟味之上至当之所置可有之候也
明治六年四月廿五日改　　（川崎昌一文書）

日露戦争時には地方の青年団（会）が大いに活躍したので、内務省は地方青年会の向上発展に関し、文部省は普通学務局長名で青年団奨励について通牒を発し、地方青年団の設置と発展を促した（「県史」より）。

岩川の青年会（団）

岩川本町の青年会の出来たのは明治三十五年ごろで、尾中嘉次郎たちがつくった。当時尾中は会長であった。青年の年令は当時十八歳から二十五歳までであった。青年会の基本金つくりに芝居を請負うことになり、中山嘉兵衛（貴族院議員の父）から材料や土地を借りたりした。その時は氷売りまでやりほとんど強制的に買ってもらった。この芝居で七、八十円もうけた。

大正三年、桜島爆発の時は青年会は率先徹夜で夜警をしそして被災者には青年会の基本金から見舞金を贈ったりした（尾中嘉次郎氏談）。

岩川では明治三十八年ごろ少年会がはじまっていた。この会では「きもだめし」をしたり、風紀を乱した者は、「打っ廻し」で足を出して打ったりした。会場は大ていお寺であった。これは二十年くらいはつづいた。

その後、青年会に入った（室屋秀吉氏談）。

柳井谷の新穂利助氏は次のように話した。

「十六歳（明治三十一年）の頃部落青年会に入った。会のある時は年長順に座をとり、火などぬくむと会長から叱られた。」

仁才よい

明治十年か二十年頃のことである。新田場と浅井の士族の子弟だけで「仁才よい」をつくった。この仁才よいでは二十五歳を越えないと妻帯は出来ないきまりであった。ところが新田場の東条家では、まだ二十五歳にならない息子に嫁をもらった。そこで仁才衆はきまりに反するとやかましくいったが、何しろ東条家の祖父はきけやくしやであったので、仁才衆の方もかなわなかった。それからこの仁才よいはやめになったという。

この後、青年会に移っていった（鮫島利雄氏談）。

梶ヶ野の仁才入り

梶ヶ野では昔は十五の仁才入りを行った。

男の子が十五歳（数え年の十六歳の時になる）になると、部落の「仁才入り」をする。その行事は、旧正月二日で、その日新しく仁才になる男の子は、もとからの仁才衆と共に梶ヶ野乙名の後裔の家（現在の朝倉秀士の家）に集まる。新しく仁才入りする男子は、この日は前記乙名の家の床の前に下り向きに座る。この新仁才は棒（ぼっとう）を持ち、袴の代わりにしめ縄を腰に巻きつけている。そこへもとからの仁才衆が来て、床の前の新仁才の前に座り、

「旦那さあ、旦那さあ、おまんさあ達は、何処から来やしたか」といんぎんに挨拶すると新仁才の方は

「よう、おいどま、鹿児島から来た」と答える。

その中、仁才衆は、新仁才の方に背を向け着物の裾をはいて、こそこそ帰っていく。それを新仁才達は持っている棒で、打ったり、火鉢にコショウをくべて、その煙を吹っかけたりして、追い払う。

この後は、この梶ヶ野乙名の家を出て、各自の門（かど）の乙（おつな）名の家に移り、仁才衆と同座するが、その時はもとからの仁才衆が上座に、新仁才は下の座に座り、ここでほんとうの仁才衆に入る。

この座では、仁才入りの歌を廻りで歌うことになって居る。歌のうたえないものは、鶏の鳴きまねでもしなければならぬという。

この仁才入りの座では、年長の仁才から「お前達も一

人前のオセになったのだから、これからは人の家に行った時は「おぢゃすか」と挨拶し、道で人に会ったら挨拶をするものだ」と教える。

最後にヂンの歌を歌う。これは初めて仁才に入った人から歌うことになっている。（八木直熊氏談）

現在梶ヶ野では正月三日を「はつどし」といい、中学校を卒業した者（以前は高等小学校二年卒業）が仁才入り、すなわち青年に入る。この日青年団では、部落内の或る家を借りて、青年入りの行事を行う。その年新しく青年に入る者を上座に座らせて、そして青年に入らせて下さいと挨拶をさせる。今は簡素ではあるが、こうして青年入りが行われている。

久木山部落の青年会は明治四十五年に始められた。昭和六年に青年団に改めた。

久木山青年団では昭和六年頃から厩品評会を始めた。部落各戸の厩舎を毎月一日に青年が見て廻って成績をとっておく。採点は切返し、砂取り、管理三項に分けられる。こうして毎月採点して置いたのを、一年間集計して、十二月二十五日総会を開いて、賞品授与式をあげる。この日、青年は藁工品品評会、婦人会は野菜品評会を催した。

この行事は終戦後も続いた。（鮫島利雄氏談）

桂の桂栄一郎氏の述懐によると、明治末期、大正初期の頃、青年会の前に「仁才寄り」というのがあり、その後青年会が出来たという。学校を卒業すると仁才つきあいをした。二十歳の頃青年会が始まって、それに入会した。青年会の活動は、道路清掃や火事の手伝いなどをし、青年の基金つくりに甘藷を植えたり、部落の人の畑打ちを請負ったりした。畑打ちは月夜の晩にやることもあった。青年入りの式は正月に行われた。

高木秀吉氏の資料によって大正五年頃の事情を記す。

大正五年二月には嚼唄郡連合青年会の発会式があった。

大正五年十二月、郡連合青年会で、青年の年齢を従来四十歳迄であったのを満十五歳から三十歳迄とした。部落によっては三十五歳迄とする所もあった。

部落青年会、校区青年会、村連合青年会、その上に郡の青年会があった。

岩川では年に一回、郡の青年総会があった。総会では各村の弁論があり、青年会の運動会も小平原であった。郡の青年幹部講習会が岩川や時には他村でも開かれて、各町や校区から出席した。

郡の青年会の総会には優勝旗争奪戦が行われ、各町村覇をきそったが、この成績は単に運動競技だけでなく、運動競技の成績と補習教育の成績、それに、徴兵検査の成績の総合成績によったのであった。

「永田勘右衛門日記」から青年団関係の記録を抜萃する。大正から昭和初頭の青年団の様子が想像される。

大正六年――三月十三日、村青年団本部より手紙来る。十七日団長会。三月二十六日朝八時十八分菅牟田校集合、岩川校へ十時集合、全村青年を六ヶ中隊に編成す。午前までにすむ。三月二十八日青年会、朝七時半出発岩川校へ八時集合。三月三十日、午後、青年会、会長、副会長、幹事改選す。分団長花牟礼勇助、山口遥、幹事貞助森光。四月一日、菅牟田校入学式、青年の入退団式。

大正八年三月三十日、郡の青年会あり。五月二十六日、青年ののいねうえ。十月二十日、青年野モチとりいれ。

十一月二十五日、青年会のモミスリ。六斗一升四合あった。大正十二年十月十七日、瑞義恒吉に武徳会見に行く。岩川村青年大勝利により優勝旗をもらう。

大正十三年―三月十日、岩川町小平原にて郡連合青年総会あり。

大正十四年―三月八日、瑞義は郡連合青年役員会（小平原）。四月一日瑞義は入退団式、夜方限の青年入退団式（福吉方）九月十九日、朝三時半瑞義桜島登山し、鹿児島に青年団の見学、二泊の予定。旅費五円位。十月八日瑞義青年の稲刈り。十二月十二日、瑞義は本日午前青年の甘藷とり、青年の甘藷、総二十三箇有る。

昭和二年―九月十八日小平原にて青年総会（この頃、この永田日記に補習学校のことがたびたびでてくる。）。

昭和六年九月十三日、郡青年会運動会見に行く。

大正十四年三月発行の「贈唹郡案内」の中から青年団関係を抜萃。

贈唹郡内の青年団数は四二で、各町村では連合青年団を置いて統一し、更に贈唹郡連合青年団によって統一している。連合青年団は基本財産は持たないが、本団及び分団所有の基本財産額は現金二一、七〇〇余円、田畑三二町八段、山林三七町歩余に達している。

内務、文部両省及県から表彰を受けたのは次のとおりである。

市成青年団（内務省、文部省、県から）

蓬原青年団（県から）

菅牟田青年会

大正十五年ごろ、菅牟田の青年会では会の基本金つくりに畑作をし、視察などにも行った。部落で水陸稲の競作会も行った。夜は青年は菅牟田小学校に行って、裁縫室の畳をあげて、剣道をよくやった。菅牟田ではそのころ曽我の傘焼きをした。五月の夜、学校の庭に紙傘の古いのを集めて傘焼きをした。ここの曽我の傘焼は古くからあったわけではなく、時の校長池之上正孝（串木野出身）の指導で行ったのであった（永田瑞義氏談）。

明治廿三年二月九日、百引、市成、恒吉三ヶ村の青年討論会を恒吉校で開く。

坂元の青年会

明治四十年頃、坂元には青年会があった。中坂元、下坂元は郷士、上坂元は在である。青年は十六歳から二十五歳までであった。妻を持っていても二十五歳までは会員であった。仁才入りは十六歳で、正月十五日に組入りをした。仁才入りの時は仁才頭が上座正面に座り、左右両側には会員が各年齢順に座り、そして末座に新入会員が座り、「今からどうかおたのみします」と新入会員が挨拶をする。そのあとで仁才頭が青年の心掛け、規則などについてきびしい訓戒をした。青年はきまりを守り、先輩のいうことを聞いて勝手な行動は許されなかった。

青年会は自分たちで働いて資金をつくった。仕事は畑打ちが多かったが、昼間は自分の家の仕事をして、夜、晩飯を喰べてから一緒に集まって、依頼された畑に行って畑打ちをした。夜は十二時ごろまで畑を打った。畑打に出ないと制裁された。もっとも昼間働いたこともあった。畑の斜面の地ひきなどもした。

当時坂元では青年が二十人くらいいた。上下の区別はきびしく悪いことをすると制裁を加えられた。青年は剣道や角力をよくした。

角力は当時非常に盛んであった。部落から、米や芋をもらい、お金もいくらか寄附があった。会員は各自米を五合宛持ち寄った。角力の日は朝、草きりをすますと、すぐ角力の準備に出て行った。一時過ぎから角力ははじまり、最初は子供たちからはじめて、だんだん青年になった。角力は非常にはずんだもので、通山、財部、敷根、浜之市あたりからも来た。

角力のすんだ夜は鶏をとって、焼酎を飲んでうちあげをした。御飯は大てい鶏飯であった。

そのころは角力はあちこち盛んで、新田場の水神角力

が盛んであった。昔水路の出来たのち祝った角力で、場所は新田場部落の上の方であった。恒吉の招魂社の角力も賑やかであった。

秋から冬にかけて夜「なわねこ」をよくやった。部落の家を廻ってしたが、人数は十人から十五人くらい組んでした。「なわねこ」は農家で使うなわをねるのであるが、普通は「はなわ」を一五〇尋、莚を一枚、叺を二枚くらいつくったが、仁才のいない家では青年たちが「かせねこ」といって加勢をした。「かせねこ」の場合は「はなわ」莚、叺などすべて倍の量をねった。それだけサービスしたわけだが、頼んだ方ではその代わり鶏をとって御馳走をした。

郷士の仁才衆は昔はお仮屋に集まって、そろばんと習字を習い、その後で剣道や柔道をしたと薬丸仲之助の父は話していたという（以上薬丸仲之助氏の談による）。

「中内伝右衛門日記」に次のような一節があるので、明治三十七年ごろは既に青年会のあったことがわかる。

「明治三十七年一月二日、青年会に出会、五銭会費に酔うて学校に宿泊す」

中内伝右衛門は当時月野校教師であるので、青年の会には指導者として出席したわけである。

義士輪読会が昔は各地でよく行われたが、月野村中内伝右衛門日記に次のような記録があるので、当時の模様を知るために次に記す。この日記では伝読会となっているしたびたびこの文字を使っているが、普通は輪読会と言った。

義士伝読会

明治三十七年一月三十一日

午後八時開会、出会生徒約七十名及び既卒業生吉田民義、宮原綱義、吉田甲、野村綱秀、中内伝次、中川藤吉、丸田武義等の諸子並に有志の人々数輩

寄贈品左の如し

一、焼酎一升近堂君　一、同一瓶宮原殿
一、同一瓶吉田殿　一、同一瓶青山殿　一、同一升及菓子
一箱中崎君、翌朝又「メサシ」十銭ガツ許り中崎君よ

以上の人々はもとより野村殿、野田様、左近充わき様等も来聴せらる。訓話により交代にて講演、翌朝ほのぼの明けに終了、盛会宜に欣快の情に堪えず。夫より野田様井上赤松野村の三君及び中崎君等と共に大いに祝盃の

数を重ねた。

月野岩元青年団

岩元青年分団は、明治四十年九月二十四日に設立され、設立当時は岩元実業青年会と称し、大正元年十一月に分団組織をした。団則を見ると、「教育勅語の御聖旨を奉戴するを目的」とし、「団員は専ら忠孝の大義に則り、協同一致上下和睦互に品行を慎み、廉恥を重んじ実業の改善風紀の振粛を謀り勤倹貯蓄躬行実践の美風を養成し、以て知恩報徳の精神を発揮し、忠良なる国民の本分を全うせんことを期す」とある。

団員は数え年十五歳以上三十歳迄を普通会員、三十歳以上四十歳迄を特別会員、四十歳以上の年長者を名誉会員としている。基本財産は田地一反五畝歩、山林二反歩、基本金の蓄積法として、共同耕作の収益、造林の収益金、夜業の収益をあてている。この外個人の規約貯金を各自勤労によって得た金十銭以上を毎月貯金することにしている。

団員の事業としては、修養として、時間励行、例会、日誌記入、早起会励行、撃剣練習視察等、産業方面では、共同耕作、義務貯金、基本金造成、農事改善競作会、副業の奨励、種苗の共同購入等、社会的方面では、入退営兵の歓送迎、掲示板の設置、指導標の設置、道路修繕及び掃除、起床就床の合図、危険物入箱の設置、夜警の実行、国旗の掲揚、消防一切の実行等であった。

入退団は毎年一月二十日と、退団者には感謝状と記念品を贈呈、団員の皆勤者には精勤賞、出席、貯金、夜警、半鐘、藁細工等の成績優秀な者には特別賞を贈った。この日、一ヶ年間の会務の報告をし、役員の改選を行った。

「月野村史」（大正四年編さん）に次のような一節がある。

「昔は十五歳に達したるとき二才入りとて二才中に酒肴を供することありしも今はなし」

久木山の総供養

大正の始めごろから、久木山部落（当時は方限）では住民が共同一致団結して向上を図ったので、漸次模範部落と称されるようになっていった。大正五年の秋になって、こうして部落が多難な歳月の後に今日の隆盛を見たのであるが、この間死亡した先輩や更に古い祖先に対し

ては、特に霊を弔うことも少ないので、この際報恩謝徳の誠を捧ぐべきだという議が、青年会で起り、これに全員賛同し、それから毎年秋に総供養を行うことになった。総供養は各戸から糯米を貰い集めそれを青年会員の手で餅に搗いて仏前霊前に供え、三部経をあげた。この餅は供養終了後お下りとして各戸に配った。

死亡者の氏名は会員の原案に笠木説教所の安藤師の意見を聞いて先祖蓮台録をつくったが、それには物故者の位牌や墓石を探って氏名行年月日略歴を書いて一冊とした。その中には文政のころの人もある。揮毫は池之上正孝校長に依頼した。

第一回の総供養では安藤師の三部経法話があって盛大であった。

これから後、毎年総供養を続け、蓮台録にその年の死亡者を記録した。

その後、青年会員が僅かに二名になった時代があって、その時、婦人会の協力を求めることになり、それ以後、青年と婦人合同で総供養を行い、現在まで続いている。

総供養には現在は覚照寺の平島住職が招かれている。

月野広津田の近堂正行氏は月野青年会について次のように話した。

月野村の青年会の発足ははっきりわからないが、大正中期と思われる。従来、青年会長は村長が兼務であったが、大正十年頃、平松敬三（明治三十三年生）が青年で会長になり、これから活発な活動が行われるようになった。平松の後に広津田の近堂正行が（明治三十二年生）が会長になった。

当時、各部落に青年分会があったが、村内を四区に分けた。一区は八合原など東部、二区は下岡から上、三区は広津田、川久保、岩元、久保崎、藤ヶ峯方面、四区は桑之迫校区であった。青年の場合は第一支部、第二支部、第三支部、第四支部と呼んだ。例えば、月野村青年団、第三支部、広津田分団と呼んだ。

こうして月野では区対抗で色々な行事を行った。畜産品評会なども行い、区に優勝旗があり、優勝争いをした。体育運動会の時は青年も支部対抗で優勝争いをした。当時早起会が盛んに行われ、早朝エイサオイサのかけ声勇ましく各部落をかけ足で廻った。青年会では鹿屋、鹿児島試験場の農事視察に行ったり、部落で基金づくりに共同耕作をしたりした。

月野村としては剣道、体育を奨励した。当時郡の青年

総会が岩川の小平原で毎年一回開催された。その総会では県の加治屋哲主事などの講演、各町村青年の弁論あり、その後で運動会、撃剣、角力、徒歩などで優勝を競った。この運動会で優秀な成績のものは県の運動会に出場した。

県の加治屋主事に引率されて岐阜の薩摩義士墓参に行ったこともあった。これは県下から青年が参加したのであったが、囎唹郡からは、近藤正行（月野）橋口国義（野方）が行った。

岩川の武徳殿で、岩川警察の武道会があり、その際、撃剣で岩川、月野、恒吉三町村が優勝旗争奪戦を行った。この会に月野は六回連続優勝をした。当時の武徳殿は岩川小学校の下庭の元プールがあった所で、武徳殿の建物はその後食糧事務所に使用された。（以上近堂正行氏談）

（中内日記）―大正八年四月三十日、月野村青年総会の決議事項一、規約貯金一、時間励行一、身体検査の実行一、撃剣練習をなすこと。

大正七年一月廿五日付「中内日記」に、郡役所で各町村長各学校長協議会があり、その中で郡青年総会についても協議されている。

大正七年三月現在、月野村の青年団員数は一六八名である。戸数五七九戸、人口三〇九一名。

三月廿二日郡青年会及び在郷軍人総会があった。

（永田日記）―大正十年四月十五日菅牟田校区の青年入退団式あり。

「曽於郡統計要覧」によれば大正五年度の調査で、青年団員は岩川七三〇名、恒吉三八二名、月野二八八名となっている。

戦争前後は青年団、婦人会など社会教育関係のことは青年学校所轄であった。それで、町村青年団長は青年学校長で、副団長は男女青年がなった（元月野青年学校長坂元貞雄氏談）。

終戦後、昭和二十一年ごろから青年団の結成が各地で行われるようになった。岩川、恒吉、月野においても、このころに団が結成したものと思われるが、資料がなく詳かに出来ない。昭和廿一年から廿二年にかけては、青年団は最も華々しく活動し、相当に青年の力を買われた時でもあった。一方、敗戦後の虚脱から演芸が風靡し、

各部落でもよく青年の演芸が催され、更に青年の中央の会合などにも必ず演芸がとり入れられた。こうした中にも青年団の組織は緊密になり、運営も活発になっていった。殊に昭和二十二年四月の県議会議員選挙には、青年団の推薦が大きな役割を果たした。

大隅町連合青年団

町村合併により昭和三十年一月大隅町が誕生したので、校区青年団でも連合体をつくることとなったが、十一校区の青年団はそれぞれ運営方法などに違いがあり、各校区共通した運営となるまでは連合青年団とし、それが軌道にのったら連絡協議会としようという事になった。

三十年四月一日から大隅町連合青年団が発足したが、当時団員は岩川町が五百数十名、恒吉、月野村で六百数十名で合計千二百人くらいいた。第一回総会を岩川中学校の講堂を借りて開催したが、中に入り切れなかった。連合青年団長に藤本光昭（伊屋松）が選出された。

連合青年団に総務部、産業部、体育部、生活部をおいて年間計画を各部で策定し、各校区青年団に流した。その後計画策定が各校区に定着した後は、本来の姿にかえって各校区青年団で年間計画を策定したものを連合青年団で集め連合青年団の年間計画の参考とした。

藤本は二年弱団長をして二代は上村輝男（乙川内）、三代谷山徹哉（炭床）と続くが、上村の時か谷山のころ、連合青年団を大隅町青年団連絡協議会に改組した。

当時は体育大会は勿論であるが、生活改善や産業振興を主力に活動し、県の産業振興体験発表などにも関与したものである。機関紙も四半期一回発行していた。（藤本光昭氏談）校区青年団は小学校合併統合により減少していったが、高度経済成長の波の中で農村青年の都市への流出や、町在住であっても勤務などの関係で青年団員の減少が続いた。平成元年現在、七校区青年団で一〇〇余名となっている。

現在未加入者の加入勧奨、組織強化に取り組んでいるが仲間づくりを主体に自営者青年の育成、団員研修、スポーツ振興等行事を計画実施している。年中行事として町村合併記念町内一周駅伝大会も続けている。

処女会

青年団は男子だけであったころ、女子青年団は処女会という名称で、大正五年七月全国処女会の連絡機関とし

て処女会中央部が生まれ、昭和二年に大日本連合女子青年団として成長した（県史）。

岩川、恒吉、月野に処女会ができた時期は不明であるが大正の後期あたりと思われる。学校を卒業した未婚の女子青年で組織され青年団の活動と一緒に活動しているようであるが、自主的な活動は当時の風潮としてないようである。

昭和六年十一月十九日「聖上陛下大演習より御帰還の途次鹿児島へ御行幸あらせ賜ふ。之がため四女よねは処女会代表として十日出鹿」（中内日記）。

このころも処女会はあったのであろう。

婦　人　会

明治三十四年、奥村五百子等により軍事援護を目的とする愛国婦人会が設立されたが、鹿児島には三十六年支部が結成された。

一方、愛国婦人会とは別に、昭和七年、三宅いね子を会長とする国防婦人会が発会したが、これは陸軍の指導でつくられた軍事援護団体で、県では十二年に国防婦人会鹿児島支部が設立された。

また戦争とは無関係に、女の講である観音講やその他の目的を母体として発達した婦人会組織もあったが、昭和五年、文部省の後援により大日本連合婦人会がつくられた。これらの婦人会間に摩擦も生じたが、戦時体制強化の時期となった十七年二月、各種婦人会を統合し、婦人報国団体として大日本婦人会が創設され、出征兵士見送りや遺族の援護、防空訓練などが日常の活動となった。

岩川町婦人会

岩川町の婦人会は初代会長は中山嘉兵衛の妻ユキであった。ユキは生存中はずっと会長であったという（尾中嘉次郎氏談）。

以前の婦人会は観音講の形で考えられるようである。観音さまは部落に申し受けてあり、観音さまの座元はたいてい廻りもちで、そこで大体月一回、あるいは年何回といった観音講が催された。会員は別に年齢のきまりもなく、各戸から出て、煮〆など持ち寄り観音さまをまつった。観音さまは女の神さまで、観音さまをまつるとお産も軽く、女の幸せが恵まれるというのであった。また、この講のとき女ばかりで僅かずつではあったが、出しあって模合（モヤイ）のようなこともした。

しかし、こうした観音講も戦争が烈しくなるとやめになった。満洲事変、支那事変と漸次時局が緊迫してくると、婦人会でも国防に協力させる強力な組織をつくることになり、昭和十三年各市町村に分会を置いて発足することになった。そこで岩川、恒吉、月野各町村でも国防婦人会分会を結成した。その組織は、町村聯合婦人会、愛国婦人会と同じで、会員も結局同じ人ということになり、町村の中央に分会、各校区に分区、各部落に班を置いた。国防婦人会は会合のある時は、会員は和服に白エプロンをかけ白の襷（たすき）に「大日本国防婦人会」と染めだしたのを肩にかけた。

国防婦人会分会長（町村）は、岩川では最初覚照寺住職夫人平島アヤ子、副会長川崎シマであった。平島は三年くらい在住して後、川崎シマが分会長に就任、終戦の時まで続いた。

愛国婦人会は当地方では昭和の初めごろから組織されたものと思われるが、詳細はよくわからない。愛国婦人会の事務は役場の兵事係が担当していた。

愛国婦人会は満洲事変のころから一般的組織が強化されて町村の中央の愛国婦人会分会から、各校区分区、部落班の緊密な組織で活動を続けていた。会合のある時は、会員は赤地に「愛国婦人会」と白抜きにしたタスキをかけた。

愛国婦人会分会長（町村）は、岩川町では歴代町長が分会長を兼ねることになっており、川崎武二町長の分会長のあとをうけて、大津廿町長が分会長になり、終戦に及んだ。

国防婦人会、愛国婦人会の事務はたいてい役場でとっていた。

婦人会は徴兵検査の時には出席した。在郷軍人の点呼の時もモンペ、タスキ姿で必ず出席、婦人会長が号令をかけて指揮した。場所は小学校校庭である。点呼の時、都会から帰って来た在郷軍人が髪を長くしていると、点呼官付の下士官が、長髪をわし掴みにしてひき倒すということもあった。婦人の竹槍訓練もよく行われた、赤ちゃんをおんぶして竹槍を振った姿など忘れ難い。

婦人会では戦地の将兵へ、慰問品や慰問文を送り、また出征軍人の遺家族の慰問で町村内をよく廻った。出征軍人の見送りはもちろん盛大に見送りした。岩川馬場では部落に国防婦人会の旗があった。紫地に桜の花を染めぬいて、大日本国防婦人会の文字があった旗を持って駅へ見送りに出た。中には一日に二度も三度もつづけて出

ることもあった。

戦時中は金属の供出があり、婦人会もそれに協力した。金、銀、銅、うすばた、錫器など供出した。

郡から産業戦士の慰問に行ったこともあった。郡の新沢主事ともう一人郡書記の引率で、郡内十一ヶ町村から各町村一人か二人参加した。まず延岡の人絹工場、別府の海軍病院、小倉の兵器廠、あさひ地下足袋などの工場を慰問し、帰りに熊本衛生病院を慰問して、四泊か五泊で帰って来た。各工場、病院では郷土出身の人に飴などをみやげに持って行った。

愛国婦人会、国防婦人会の会費は別々に納めた。組織は部落の婦人会で会費を集め、校区を経て、町村に集め、町村では郡、県、国へのそれぞれの負担金を郡へ納めるというようになっていた（以上主として川崎シマさん談による）。

婦人団体は従来、町村連合婦人会、愛国婦人会、国防婦人会の三つであったが、組織運動強化のため統合することになり、十七年新しく大日本婦人会岩川町、恒吉村、月野村各支部）が発足した。

婦人会は戦時下にあって銃後の守りにつとめ、食糧増産に励んだ。またモンペに身を固めて防空訓練に出動、竹槍訓練を婦人にまで行った。出征軍人の見送り、英霊の出迎え、戦地への慰問袋を送り、遺族、出征軍人家庭の訪問、戦病死者の慰霊、町葬参列など銃後婦人の務を果たした。

昭和二十三年三月鹿児島の甲南校で県内の婦人会長会があり、岩川町からは川崎シマが出席した。この会は戦後の婦人会のあり方などについて協議されたが、二泊三日の会であった。

未亡人会の結成について（年は不明）三月廿日校区婦人会の話し合いがあった。

昭和廿三年から廿四年にかけて、最勝寺正枝が会長であった。最勝寺会長の後半と思われるが、廿五年一月五日九州民事部のキング（キング女史と呼んでいた）が民主団体のあり方として、団体長は一年で交替すべきだということを唱えたので、その影響は直ちに青年団婦人会に響き、青年団、婦人会共に団体長は任期一年となった。岩川でもこの影響を受けたので、この後婦人会長は一年代わりとなり、廿五年度は本村テル（柳井谷）で一年会長を勤めた。また団体の連合体にしても、連合体はいけない、連絡協議会にすべきだというので、その後多くの団体の連合は連絡協議会となった。

最勝寺会長の時は、婦人会の基金は僅かしかなかったので、婦人会で紅（べに）を売って相当基金をつくった。町婦人会から校区の婦人会に販売方を依頼、校区は管内の各部落に売ってもらったのであった。また小学校の運動会の時、婦人会で手踊りをはじめて踊った。これから祝のある時など、婦人会で踊りを踊ることになった。

昭和廿五年四月、郡婦人会から皇居清掃奉仕に上京することになり、岩川からは緒方、最勝寺、井ノ上などが参加した。郡内からは約三十人くらいが参加した。一行には鉄道から旅客係、岩川の駅長、それに医者が一人ついて行った。四月十四日岩川出発、着京後皇居で三日間清掃奉仕をした庭の草をとったり、箒で掃いたりする奉仕であった。その後、岩崎与八郎の招待、バスによる案内があった。東京の宿舎は日赤であった。帰りは大阪でアメリカ博覧会を見学、更に伊勢、二見ヶ浦に行った（主として最勝寺正枝さんの話による）。

岩川町婦人会では、従来永年の間婦人会長を勤めて来た川崎シマが昭和二十二年度までで辞任、最勝寺正枝が昭和二十三、四年度就任した。その後、昭和二十五年度は本村テル（柳井谷出身）が、会長になり、それから昭和二十六年度から昭和三十年大隅町合併まで袴谷ヨシが会長を勤めた。

昭和二十七年から三十年にかけて正月対策として、酒はほどほどに、正月料理は三品以内にという運動を毎年行った。昭和二十八年岩川町婦人会は貯蓄成績がよく中金から表彰された。部落は狩谷、個人として袴谷ヨシが表彰された。

昭和三十年には岩崎与八郎の招待で、郡内の各町の婦人会長が上京した。三月二十八日出発、郡の税所主事が引率鉄道の旅客係が世話した。人員は郡から総数三十八人、この中、岩川は四人、月野三人、恒吉は参加がなかった。東京では市内見学、日光、熱海を見物、帰途京都に一泊見物した。四月八日に帰着した。

昭和三十年一月十五日、岩川町ではじめて成人式を公民館で行った。

その年二月十五日、婦人会がヒロポン撲滅運動に乗り出した。映画会や講演会を開いた。

昭和三十年は大隅町合併の年である。岩川、恒吉、月野各町村の婦人会では、それぞれ合併への準備をすすめ、そして各町の婦人会を解散した。岩川では三月十日、教育会館で午前十時から岩川町婦人連絡協議会解散

総会を開催した。会は解散宣言、部落表彰、感謝状授与、それに財産処分の発表、レクリエーションもして最後に「別れのうた」をうたって、発展的解散をした。

恒吉村婦人会

恒吉の婦人会について調査したが、戦前のことはよくわからなかった。当時婦人会に関係した方はほとんど故人になっていて調査するよすがもなかった。戦前の村婦人会長に勝目とし子（琢磨村長の夫人）ひとりははっきりした。戦争前は、昭和十三年大日本国防婦人会恒吉分会が結成され、それに従来の愛国婦人会恒吉分会と恒吉連合婦人会があったはずでこの三者が合同して大日本婦人会恒吉村支部が発足したはずであるが、この辺の事情は全くわからない。恐らく前述の三つの婦人団体を、勝目とし子が兼務していたのではなかろうかと想像されるだけである。

終戦後もはっきりしないが、恒吉村婦人会長は勝目とし子の後、長江サヨ、伊集院まち子、川畑節子、中島キクエ、小田静枝、前原シヅの順ではないかと思われる。

昭和二十五年四月、郡婦人会から皇居清掃奉仕に上京したが、その時恒吉からは村婦人会長川畑節子が参加した（上京の詳細は岩川婦人会の項参照）。

恒吉校区婦人会長を長く勤めた能見スナ子さんについて婦人会活動を聞いた。年中行事として、五月五日の「子供の日」行事は各部落で行うことにきめ、各部落では子供を集めて学芸会を開き、小さい子供にはお菓子を、大きい子供には鉛筆やノートを配る。

九月十五日の「老人の日」の行事も校区で決めて、各部落婦人会で七十歳以上の老人を招待する。お膳立てして御馳走をするが、所によってはそれにかえて品物を贈るところもある。

小学校の学芸会の時、校区内の七十歳以上の老人を招待して、校区婦人会から鶴亀の御菓子をつくってあげる。それには婦人会員の一人一人からお茶椀一ぱいずつお米を集める。また、数えの八十歳になった老人には湯呑をあげる。

婦人学級は農繁期を除いて、毎月校区で開いた。また家庭学級にも皆出席した。時には研修旅行で霧島、指宿に日帰りで行ったこともあった。

野町婦人会では戦前は女子青年もいっしょになって会に出た。そのころは「薪取り（たくんと）」をしてそれを売り、婦人会の基金にしたり、卵貯金をしたり、また、畑を借りて

婦人会で甘藷やナタネを植え、会の基金にした。

小田静枝さんは昭和二十六年度村婦人会長であった人であるが、郡の主催によって松田村社会教育主事の指導で野町部落の婦人活動の公開をして、郡内婦人会幹部の人たちが百余名の参観に来たことがあったと語った。この公開は自分たちで婦人会活動をしようという機運をつくった。郡の社会主事は野村綱世であった。

大河内ふぢえさんによると、婦人会の敬老会はずっと前からやっていて、物資のないころは、からいもあめをたのんでひいてもらったのを出したり、餅をついて出したりした。

月野村婦人会

昔は観音講がよく行われた。部落に観音様のお絵像があって、それを年二回、家継ぎに送って観音様をまつった番にあたった家では、餅を搗いてその他の供え物と共に観音様に供えた。一般の婦人はどんぶりに煮〆など各自つくって持ち寄った。そして煮〆を食べながらお話しをし、後には太鼓、三味線も出、踊りまで出て楽しい集いであった。あの観音様はどこの家でとまっているのか、今はわからない。もっとも婦人会がはじまったころには、この観音講ももうやめになっていたようである。

「二十三夜待ち」は昔はあったのだが、戦争中、出征軍人の家で親類が寄って行ったようである。部落では行ったところもあったらしいが、多くはなかったようである（丸田タマヨさん談）。

「月野村史」大正四年ごろの記録によると、

青年団　一、愛国婦人会　一、

これによると大正四年ごろは青年団、婦人会共に存在したことになる。

中内日記から—昭和四年二月廿四日「婦人会のなま木切りにて藤屋殿には監督に行かれ、為めに休み」

月野村の婦人会は大正八年に発足した。婦人会の結成には、当時月野小学校長であった川崎武二が力を入れて、小学校の先生たちが各部落に行って、婦人会の必要を説いた。こうして最初に婦人会の出来たのが竹山部落（会長竹山ハマヨ）、広津田部落（会長丸田タマヨ）であった。それからだんだん他の部落も出来ていった。こうして二十四の部落にみんな婦人会が出来た。そこで月野村婦人会が結成された。大正十年ごろである。

当時の会員はお嫁に行ってから、満五十歳までであった。

村婦人会の初代会長は義川エミ（義川祐吉村長夫人）で副会長は中内千代（中内伝次夫人）であった。義川会長は永年婦人会長を勤め、戦時中に及んだ。その跡を継いで副会長の中内千代が会長になり、丸田タマヨが副会長になった。中内会長は昭和二十七年三月末で辞任し、上ノ瀬政子が同年四月一日から会長に就任した。上ノ瀬会長は昭和三十年大隅町合併までその任にあった。

月野村婦人会は御大典記念に一銭貯金（月に一回）を始めることになった。一銭くらい何になると思う人もあったが、一銭がもとで大きな金にもなるという趣旨で、村内全部実行することになった。

月野に婦人会が発足してから三年後大正十年に、岩川の小平原で郡青年会の総会の時、広津田婦人会は郡から表彰を受けた。当時の郡長は大井藤助であった。

そのころ月野校で二川純夫指導の修養団の講習が数日間開催されたことがあった。そのころ、早朝軽装をしてエイサオイサと勇ましく駈け足で廻る運動が行われていた。この時の講習は盛んで、広津田婦人会では夜中から起きて炊き出しをした。

大正十年ごろ、広津田、その他の部落で、クヌギの苗木を買い入れて、部落の原野に植えた。これはクヌギを育てて薪にして売り、それを部落婦人会の基金にした。広津田では今までに三回伐採したという。クヌギは伐採すると後はまた新芽が育つのである。婦人会で共同耕作をするのは、いろいろな点で物議が起こり易いので、クヌギを植栽することになったが、これは堅実に実行されて来ており、利益もあげている。

戦争中、婦人は牛つけの講習を受けたり、競犂会を催したりした。また、月野村では各部落に色々な研究会を開催した。それはその部落の発案で、衛生とか台所改善とか何でもひとこと研究主題をかかげて、それを実行することであった。台所改善では部落基金から補助があり、各戸改善をした。祖先を尊崇するため、仏様に毎朝お仏飯をあげる、マッチの置き場所を定めることなども実行した。清潔さの維持には、特に入念に行われ、検査の日は部落各戸から出て、およそ五十人くらいが一団となって、清潔検査に各戸を廻った。そして成績によって一等、二等など五、六等まで等級をつけ、そして等級の札を貼って廻った。

郡から産業戦士慰問のため、別府、小倉へ行ったことがあった。（岩川婦人会参照）、その時月野からは会長義川エミ、理事の丸田タマヨが参加した。

当時広津田部落は婦人会の運営がよく行われていた。各戸から木灰を一升ずつよせ集めて、それを売って婦人会の基金にした。しかし後にはやめて、各戸から卵を一個ずつ出し合って基金にしたが、これも後ではお金を十銭ずつ出すようにした。また広津田では孵卵器を購入して、雛から育て、養鶏を盛んにし、品評会もやろうという計画で、孵卵器を買い入れて、卵二百個を器に入れたが、失敗して孵化しなかった。今のように電気はなく、お湯を使ってやったので、温度の調節が出来なかったのであった。この孵卵器は他にゆずった。

部落婦人会には男の顧問が二人くらいいた。部落の上の方に一人、下の方に一人といった具合である。

昭和十三年、月野にも国防婦人会月野分会が結成された。しかしその組織は村婦人会、愛国婦人会と同じで、会員も役員も同じ人であった。

戦争中は婦人も小学校庭で竹槍訓練を受けた。岩元に飛行機が墜落したことがあり、同所の婦人会は竹槍をもってかけつけたが、落ちた飛行機は日本機であったという。出征軍人の見送、遺骨出迎えなどその他他町村と同じく多忙であった（丸田タマヨさん談）。

終戦後も婦人会の総会は春秋二回開催された。春の総会は三月六日地久節の日で、手芸品展覧会を開いた。これは衣類の不足時代で麻物利用を工夫して実用品にしたものを展示した。この展覧会は以前の会長から上ノ瀬会長の時代にも続けられていた。もうやめたらいいではないかという話も出たが、やはり継続して開催した。

秋の総会の時は蔬菜品評会を開催した。秋の総会は大体十月の五、六日となっていた。会員の栽培した蔬菜を持ちより、それを売って婦人会の基本金にした。この蔬菜品評会の方は上ノ瀬会長の時からはじめた。

昭和三十年一月大隅町合併になり、月野村婦人会は解散することになった。月野村婦人会は月野校区と桑之迫校区の二つから成っていたのであるが、町村合併により大隅町婦人連絡協議会から、各校区婦人会、その下に各部落婦人会となったわけで、自然、月野校区と桑之迫校区は連合体を切り離して、それぞれ大隅町婦人連絡協議会に連なることになったわけである。その年の三月の総会を解散の会にし、小学校、中学校に花瓶を贈り、役員には記念品を贈った（上ノ瀬政子さん談）。

大隅町婦人連絡協議会

大隅町合併準備が進捗して行くと、それに従って、岩

川、恒吉、月野の三町村の婦人会では、婦人会合同について昭和三十年一月ごろから着々準備を進めていった。二月二日には岩川（袴谷ヨシ）、恒吉（前原シヅ）、月野（上ノ瀬政子）各婦人連絡協議会長と、最勝寺教育長、松田社会教育主事、本田社会主事、山田達夫、郡社会主事税所篤美など会合して、合同について次の事項を協議した。会の組織は連絡協議会か連合会か、構成は校区か、部落か、旧地区か。会則、役員の選出の方法、会員の年齢、会費、結成期日、委員（岩川、月野、恒吉）など。

その次、二月十二日に大隅町婦人会準備委員会を開いて協議した。会の組織は連絡協議体とする。構成は校区単位、会員の年齢は統一し、五十五歳までとする。ただし希望者は年齢を問わず準会員とする。結成は三月十四日前後とする。委員長は袴谷ヨシ、副会長は上ノ瀬政子、前原シヅ。その他については三委員へ委任し、会則の作成も三委員に委任する。会名は大隅町婦人連絡協議会とする。会長一、副会長二、総会は年一回、役員会、幹部会（農繁期を除く）。この日の出席者、岩川七名、恒吉十三名、月野七名。

二月二十八日準備委員会。委員二十四名出席。結成総会を三月十三日岩川小学校講堂で開く。役員は準備委員から選出することとし、本日直ちに選挙することにし、各委員から推せんした十九名について投票を行った。その結果、次の役員が決定した。会長袴谷ヨシ、副会長上ノ瀬政子。その後、委員から新運営委員へ次のような要望があった。

一、運営委員会を毎月定例会としてひらく場合、会場をもちまわりにしてもらいたい。
二、事業の一つとして機関紙をつくりたい。
三、事業収益金は歩割で、町へ二歩、校区へ八歩の割にしてほしい。

このようなたび重なる準備を経て、いよいよ三月十三日大隅町婦人連絡協議会結成総会が岩川小学校で開かれる運びになった。開会は午前十時、委員長の挨拶から経過報告、協議に入り、会則審議、役員承認、三十年度の予算承認、その他をすませ、新役員の挨拶あって中食、午後婦人会歌、レクリエーション、来賓祝辞の後、「別れのうた」を歌って散会した。なお、協議のその他で、会員は会に出席する時は上っぱりを着て出席したらと会員から提案があり、満場賛成であった。こうして大隅町

の婦人会連協は発足したのであった。

この年九月、大隅町議会議員の選挙が行われたが、須田木地区では前原シヅを町議候補に推せんして、当選した。

連協婦人会長は会則としては任期一年であるが再選をさまたげないとなっている。会長は発足後三十年から三十四年まで袴谷ヨシ、三十五年から三十八年まで孝子玉恵、三十九年は能見砂子、四十年から袴谷ヨシとなった。

三十五年度から三十九年度には、校区、部落の婦人学級を開設、婦人の教養向上につとめると共に、政治意識の昂揚につとめ、町議会の傍聴も行った。

四十一年度は「ちらさない、よごさない、こわさない」の三ない運動を主体に、交通道徳、公明選挙の推進に努めた。日本赤十字社の日赤婦人会から毎年講師が見え、家庭看護法やその他衛生関係の話があったりした。結核予防婦人会も従来からつくられていたが、地域婦人会と同体であった。

婦人の体験発表大会

町の婦人連絡協議会では、今後の婦人のグループ活動の進め方について体験発表大会を開いた。

会場は郡教育会館をよく使用したが、三十六年度の発表では折田校区の小浜たみ子（狩谷）が町代表として郡予選に出場した。

地域婦人会員は三十年二、六〇〇名であったが次第に減少し、四十年一、九〇〇名、四十九年一、一七〇名、五十九年七五〇名となり、六十三年では四一一名となっている。

五　文化の保存

昭和四十三年、中央公民館に郷土室ができ展示物がおけるようになった。四十六年、大隅町文化財保護条例が制定され、文化財保護委員に「大隅町誌」を執筆した末吉の高木秀吉を委員長に、中島勇三、松下吉之助、牧之瀬充、市後崎良昭、本田新蔵、鮫島逸郎が任命された。

四十九年三月、第一次町指定文化財答申として一九件の文化財をあげ、内一六件が指定された。

五十三年、大隅町文化財保護条例改正、同時に文化財保護審議会条例制定、従来の保護委員が保護審議会委員となった。なお同年「大隅町の文化財」を発行、文化財

に対する啓蒙を行っている。

五十五年、大隅町郷土館ができ資料展示、民具展示室と収蔵庫が設けられたのを機に、蒐集委員を設けて民具を中心に資料の寄贈、寄託を呼びかけた結果七月の開館時には六四六点の蒐集をみた。又五十七年一月現在八九〇点となっている。

町内の有形文化財については年次的に案内板、標柱を立て、また巡回保存に努めているが、埋蔵文化財についても発見に努め事後調査を実施している。伝統芸術については、指定の太鼓踊、そば切り踊りの他、指定外の棒踊り、剣舞等を含め郷土芸能保存会連絡協議会を設立して保存につとめている。

六十一年月野小学校に文化財愛護少年団の設立をみたが、六十三年から地区こども会の中にこれを組み込むこととした。

六十二年、国鉄志布志線廃止に伴い、車両の無償譲渡を受け郷土館の前庭に展示した。

毎年八幡神社で行われる弥五郎どんの行事については六十三年三月二十三日「大隅町岩川八幡の弥五郎どん祭り」として無形民俗文化財の県指定を受けた。

六　社会教育施設

大隅町中央公民館

昭和四十二年四月二十五日起工、四十三年九月完成した。場所は旧中山嘉兵衛屋敷跡で総工費約一億三千九百万円、岩川出身の岩崎与八郎の寄贈である。工事請負は小牧建設。

三階建て鉄筋コンクリートで一階九五〇㎡、二階五二五㎡、三階一〇〇㎡で計一五七五㎡となる。一階は郷土室、事務室、館長室、大ホール、二階は会議室、厨房、映写室、結婚式場、控室、大会議室（披露宴会場）、三階は図書室であるが、公民館結婚式が行われなくなった現在では控室は心配事相談などの室としている。また会議室には曽於視聴覚ライブラリーが入居、三階は消防法で図書室として使用できなくなったので資料保存室に使用している。

大ホールの緞帳は高さ五m、横一二mの豪華なもので弥五郎像と八幡神社、鳥居を図案化しており東宝舞台Kの製品である。

四十三年九月二十日、寄贈者岩崎夫妻が臨席して盛大

な落成式が挙行された。

地区公民館

社会教育施設整備事業により、年次的に建設されたが何れも鉄筋コンクリート平屋建、五二〇㎡位で、ホール、研修室、会議室、調理実習室、図書室、事務室などおかれている。また役場支所もこの中におかれている。

恒吉地区公民館

恒吉小学校跡に昭和五十六年二月二十八日竣工した。総工費六、七六〇万円、敷地面積は三、一九九㎡である。

月野地区公民館

月野小学校裏を整地し、五十七年三月二十日竣工した。総工費一一九、八四九千円、敷地面積一〇、三九九㎡である。

大隅北地区公民館

坂元小学校跡に五十八年三月十五日竣工した。総工費九五、五三一千円、敷地面積一〇、〇〇〇㎡である。

大隅町郷土館

通産省の所管であるが、工業再配置促進事業として役場の裏、川を渡った中之内九一四六に鉄筋コンクリート二階建の大隅町郷土館ができた。起工五十四年十月、竣工五十五年三月二十七日、総工費八四、五七五千円で面積五七八・三㎡、敷地面積五、一九〇㎡となる。一階は図書室、児童閲覧室、視聴覚室、事務室、二階は民具資料等展示室、収蔵庫がある。

大隅町文化会館

過疎地域総合センター建設事業により郷土館の隣、中之内九一四六に鉄骨、鉄筋コンクリート造りの文化会館ができた。五十七年十一月起工、五十九年七月二十日竣工、総工費五五七、〇六六千円、二階建、一部三階、建面積二、三九一㎡、敷地面積七、二七九㎡である。

施設は一〇一〇名収容の大ホール、楽屋、産業研修室、音楽研修室兼鑑賞室、作法室の他、広いロビーを有する。

大隅運動公園

曽於北部地区広域生活環境施設整備事業により、大

隅、輝北、松山、末吉、財部の各町を含む曽於北部広域公園管理組合を設立して、岩川の吉井台地に大隅運動公園を建設した。

昭和四十八年起工、五十三年度まで六か年の歳月と事業費九億三千万円を投じ面積約一二haである。

施設の概要を記す。

。体育館は二、二二〇㎡、バレーコート三面がとれる広さである

。武道館は柔道場と剣道場を有する。四九九㎡

。弓道場　一一五㎡

。プールは五〇m八コースの公認プールと幼児プール

。テニスコート　硬式一面　軟式　三面

。陸上競技場　三〇〇mトラック八コース、ソフトボール二コート

。野球場　ナイター設備あり

。ゲートボール場　三コート

この他、研修館、民舞館や子供遊園、梅林、遊歩道などがある。

なお各町に運動施設が設置されてきたので、曽於北部広域管理組合は六十三年三月末で解散し、運動公園は大隅町の施設となった。

地区青少年館

青少年育成総合推進事業により、年次別に青少年館を建てたが、地区と年次を記す。（年次は昭和）

南地区（五十二年）、笠木地区（五十三年）、菅牟田地区（五十三年）、八合原地区（五十四年）、折田地区（五十五年）、大谷地区（五十六年）、須田木地区（五十七年）、旭ケ丘地区（五十八年）

大隅町高齢者コミュニティセンター

過疎地域総合センター建設事業により、笠木台地の南九州繊維ＫＫの前に高齢者コミュニティセンターを建てた。

木造平屋建てで三二〇・七六㎡、総工費四八、七七四千円で平成元年三月二十日完成した。研修室、会議室、調理実習室、事務室がある。

大隅町南地区農業構造改善センター

新農業構造改善事業の中の地区再編農業構造改善事業として南小学校の東一〇〇mくらいの所に木造平屋建の構造改善センターが平成元年七月八日落成した。三二〇・七六㎡で総工費五七、三二七千円、研修室、会議

室、調理実習室、事務室がある。

メルヘン文庫

渡辺組岩川営業所の隣に私設図書館「メルヘン文庫」が完成したのは昭和六十三年十月である。木造平屋建、冷暖房つきで約九九㎡、工費約一千五百万円というが、メルヘンと呼ぶにふさわしい建物である。

図書は平成元年現在約八千冊あり、幼児、小中学生、社会人向けの他、専門書等備えている。農業コーナー、長寿コーナー等も分類されている総合図書館であるが、ユニークな試みとして家庭に眠る優良図書の発掘と献本を呼びかけている。

創設者で館長の渡辺信雄（大正四年九月十日生）は、渡辺組、岩川生コン、共栄開発、大崎コンクリート、光信商会、三紘商事やスイミングスクール（六校）など十三社の渡辺組グループの会長である。

渡辺は独学で会社の今日を築いたが、これは若い頃から親しんだ読書のおかげであるという。「本は人の心を豊かにする」との信条で、ここ二十年来県内の会社がお世話になっている市町村を通じて学校に図書をということで、毎年寄付をしているが、その集大成がメルヘン文庫といえる。

渡辺はまた、町活性化のためには農家育成が大切であるとの認識のもとに、一千万円農家の育成に意を燃やし専業農家を集めて研修会を開いたり指導啓発しているが、自らもハウス栽培や甘藷栽培等を実施、加工の研究開発のため三菱商事やその他の会社などとも接触している。

戦後処理の一つとして中国残留孤児の問題がある。戦

メルヘン文庫

後引き揚げられぬまま中国に残った孤児たちや、それを育ててくれた中国の養父母たちに対する援護活動は、財団法人中国残留孤児援護基金が昭和五十八年四月設立されたが、目標十億に対してあまり実効が上がっていなかった。

五十九年一月の町名刺交換会で渡辺はこの問題を取り上げ、国民一人一〇円の義捐金運動を提案した。一人一〇円で十億を超す義捐金が集まることになる。

この提案について大隅町の町民運動として取り上げることとなり、「中国残留孤児養父母に対する感謝義捐金」町民一人一〇円以上として「大隅町明るく住みよい町づくり運動推進協議会」と「大隅町社会福祉協議会」の名に趣意書が町内に配布された。またこの募金活動が始まると県内市町村からも趣意書を送って欲しい旨の連絡がくるなど反響が大きく二百三十三万円の募金が集まった。

また、これが全国規模の活動となって援護基金は目標の十億円を達成した。

第九節　体　育

小平原・貝ケ塚段

岩川の堤谷一帯（大隅税務署や大隅簡易裁判所などのある所）は、小平原といって広場で、大正から昭和にかけて岩川はもちろん郡内のいろいろな行事がここで行われた。正面は白砂の崖になり、そこへ段を築いて壇の役割をしていた。参会者は平地に整列し、主催者や指揮者はその壇の上に居て会を進める場合が多かった。

ここでは町内の行事は勿論、郡青年団連合運動会、郡内小学校運動会、郡在郷軍人会などが行われた。

恒吉の貝ケ塚段は恒吉村の慰霊碑がある所で、毎年慰霊祭が行われているが、ここは恒吉村の連合運動会や行事があった所であり、岩川の小平原と共によく使用された。市成村などとの連合の行事場所でもあった。

「勝目文書」に次のような記録がある。

明治四十一年十月冀北教育大運動会を貝塚段にて挙行。参加校は牛根境、百引、高隈、市成、恒吉の各校であった。

駅伝競走

東京、京都間駅伝競走出場

昭和三年御大典記意事業として、東京・京都間の駅伝競走あり、それに月野十三迫出身の高松義盛が県代表として出場、第十一区となっていた掛川、天竜川間を西軍の選手として走破した。もと桑之迫小学校に、当時の額があったが、次のように記してあった。

証

鹿児島県代表
高　松　義　盛

右者本競走会ニ第十一区掛川天竜川間西軍選手トシテ参加セリ依テ之ヲ証ス

昭和三年十一月十二日

御大典記念東京京都駅伝競走会
会長　内閣書記官長　鳩　山　一　郎

月野では、運動家として、高野利通（中野）、藤元景範（藤ヶ峯）は優秀なるマラソン選手で、郡内は勿論、県段階まで活躍した。その伝統の後に高松選手が出た。

囎唹郡駅伝競争大会

第十三回囎唹郡各町村対抗駅伝競争大会は、昭和四十二年一月二十二日、大崎町野方小学校前出発、有明町を経由して、志布志町役場間四一・二㎞、七区間のコースで、八チームが参加した。成績は末吉町が二時間一六分一七秒で優勝、二位は大隅町で、二時間一八分、三位大崎町、四位松山町、五位財部町、六位志布志町、七位輝北町、八位有明町であった。なお、区間賞として二区で大隅町の上迫が受賞した。

囎唹郡町村対抗駅伝大会は、県下駅伝の選手選考をかねて昭和四十二年十二月十七日財部町大川原―末吉町高千穂デパート前の八区間四十五・七㎞で行われ、郡内八町参加したが、大隅町が二時間二八分二〇秒で優勝した。

学校の記録

岩川高等学校は陸上競技で優秀な成績をあげている。

昭和二十九年六月十三日、鹿児島県高等学校陸上競技大会で優勝。二十九年七月三十一日、第七回秩父宮賜杯全国高校陸上競技大会で、日高勝、走高跳一m七三、第三位。三十年六月二十六日、全国高校陸上競技対抗選手

権大会南九州予選大会で、フィルド第一位。三十一年六月十七日、県下高校陸上競技大会で総合第二位。フィルド第一位。三十一年八月五日、第九回秩父宮賜杯全国高校陸上競技対抗選手権大会で、総合第六位、フィルド第三位。三十六年六月四日、県下高校陸上競技大会で総合第二位。翌三十七年六月十日同大会で総合第二位。三十七年八月二十六日、県下高校体育大会陸上競技（九州大会予選）で優勝。三十九年五月二十四日、県下高校陸上競技大会で総合第二位。四十年五月二十二、二十三日、平田憲四郎一一〇H、五種競技第一位。四十二年六月三、四日、川崎勉（二年）百m二百m共に第三位、北川善十、棒高跳第三位。大隅地区高校陸上競技大会では、昭和三十四年第一回大会から四十一年第八回大会まで八連勝。国分自衛隊創立記念運動会では、昭和三十七年から三十九年まで三連勝（以後参加せず）。

県高校記録、昭和三十年男子走高跳一m八五日高勝。三十一年、棒高跳三m七二森山征夫。三十二年、走幅跳六m八七津田東。三十九年、五種競技二九九五点平田憲四郎。

昭和三十年八月二十八日県陸上競技大会で、月野中学校津田東は走幅跳に新記録樹立した。九州では第一位、全国で第七位となった。なお三段跳も県で優勝した。

剣　道

県民大育大会剣道大会で、大隅町チームは二連勝を飾った。

「昭和四十一年十月廿五日開催された第二十回県民体育大会剣道大会、町村対抗団体試合に、県下各町村から郡予選を勝ち抜いた精鋭十五チームが出場した。この大会に大隅町チームは曽於郡代表として志布志チームと共に出場したが、善戦して前年につづいて連続優勝し、晴れの大会優勝旗を大隅に持ち帰った。準優勝戦は大隅町対志布志町、優勝戦は大隅町対知覧町で三対二であった。出場剣士は、監督新川勇五段、先鋒中礼登二段、次鋒桐野嵩二段、中堅馬場光博五段、副将大脇菊雄六段、大将有村俊六段

岩川剣道クラブ

岩川剣道クラブは岩川の小中学生によって昭和三十八年に少年の不良化防止をねらって発足、毎週三回警察署道場で中礼登、有村俊、馬場光博等の指導を受けて練習した。三十九年県大会で三位、四十年、四十一年共に県大会で二位、四十一年水戸市で開かれた全国少年剣道錬

成大会で準決勝まで進み、四十二年三月二十六日行われた前記第八回全国大会では宿願の全国優勝を果した。監督は馬場光博選手六人、二十八日帰郷、盛田町長、剣道クラブ親子会等の出迎えを受け祝賀会を開き、翌日は岩川中ブラスバンドを先頭に市中パレードを行った。

四十一年一月には福岡県高田町若葉剣道クラブの小中学生二十人が岩川に来て、岩川剣道クラブ三十七人と親善試合をした。

四十二年九月クラブ員七人はＮＨＫから招かれて九日上京、十日夜ＮＨＫスタジオに出て、十一日帰郷した。一行は岩川中三年大重裕資その他で、中学生二人、小学生五人引率は有村俊（クラブ指導者）であった。

四十三年六月二日、鹿児島市の県武道館で、鹿児島県中学校剣道大会が開催され、六十四校が参加したが、岩川中学校も出場、決勝戦に進み、大川中を4—3で破り、優勝した。岩川中は山口、能勢耕、馬場、鳥丸、能勢常、北川、岩佐が出場した。

大隅町の剣道チームは昭和四十年から三年間県民体育大会剣道競技に出場、連続優勝した。チームは先鋒大重裕資初段（岩川中三年）、次鋒大重仲市初段（鹿商二年）、三将小川路勝次初段（土木事務所）四将中礼登二段（中礼商店）、中堅大脇菊雄六段（九電月野発電所）、副将馬場光博五段（教育委員会）、大将有村俊六段（簡裁）、補欠、桐野嵩三段、吉村俊雄五段。監督新川勇。

相　撲

昔は青年を中心にどこでも相撲が盛んであった。特に奉納相撲、十五夜の相撲など盛んなものであった。

「月野村史」に次のような一節がある。

相撲はもとは各方限でよく行われていたが、招魂社相撲を行うようになってから、方限ではなくなった。

（大正四年ごろ）

戊辰相撲

戊辰の役を記念して、岩川中園の上の段で毎年行われた。もとは岩川町役場が主催したが、今はない。

早馬ン段の相撲

恒吉貝ケ塚の先にもう一つ丘がある。県道の上であるが早馬さあが祀ってある。祭りの時相撲があり、早馬ン段の相撲といわれていた。

招魂社相撲

月野の大田神社境内で行われるものであったが、日露戦役の後に始まった。もとは農協の上に招魂社があり、その時は農協のところで相撲があった。

笠木開田の相撲

反土相撲と呼んでいるが、笠木開田を記念して始めたもので、九月六日に開いていたが、今は八月の土地改良区の総会の日に開催している。こどもだけでなく大人たちも取っている。

町民体育祭

町民みんなの健康と親睦をはかり、明るい町づくりを目的として町民体育祭は昭和三十二年からはじまった。

昭和三十六年度の例をあげると十一月五日の弥五郎どん祭の奉納柔道、剣道、弓道、角力大会を皮きりに、六日は陸上競技大会、保育所の幼児から壮年婦人にいたるまで多彩なプログラムで行う。校区ごとに色分けをして覇を競う。十一月十二日に部落対抗ソフトボール大会、バレーボール大会、この大会には町内十二校区、各地域毎に、男子はソフトボール、女子はバレーボールの選手を各年代別に選抜し、婦人、子ども、大人が一緒になって競技する。

校区公民館対抗、小中学校青年婦人一般、消防分団対抗など賑やかに毎年行われている。

四一年度から大きい校区をAグループ、小さい校区をBグループとして、校区の総合成績で優勝をきめることになった。Aグループ校区は岩川、月野、笠木、大隅南、大隅北、Bグループは恒吉、大谷、須田木、菅牟田、神牟礼。四一年度は恒吉校区が優勝し、四二年度は岩川校区が優勝した。なお、開催日は四一年度は十一月三日文化の日であったが、四二年度は十月十日体育の日であった。今後毎年体育の日に開催する。

学校統合が終ってからはA、Bグループの区分は廃止した。

修　錬　館

町役場近くに柔道の修錬館があった。昭和三十一年五月に完成した。毎日（日曜祭日を除く）夕方五時半ごろから七時ごろまで末吉、岩川、月野、松山から小学生、高校生、青年や官公署の人が来て柔道の練習をしていた。

館主小浜進は海軍から警視庁に入り後、奈良県警察に転じ、柔道教師を続け二十八年帰郷、昭和十年五段と錬士号を受け、三十一年七段に昇進。全国高段者柔道大会に出場鹿児島県柔道会理事、審議員。大隅町柔道剣道講師。

四十六年十二月九日、小浜は死去した。その後、山口長麿、坂口良雄等がしばらく修錬館を守ったが、間もなく閉館した。

社会体育行政

従来社会教育課にあった社会体育の分野が五十一年四月社会体育課として独立、町民総スポーツをめざし施設や指導体制の確立を図ることとなった。

体育指導員制度を設けたのは四十九年四月であるが、課独立に伴い、これを強化した。

また体育協会を設け、各校区にあるスポーツ少年団連絡協議会も設けた。

六十三年現在、体育協会一四部、スポーツ少年団一八部があるが、この他に各校区公民館を中心に校区毎に運動会や駅伝大会、親子ソフトボール、ゲートボール、グランドゴルフ大会など行っている。

体育協会の部名は、野球部、バレーボール部、剣道部、柔道部、弓道部、陸上部、銃剣道部、ゲートボール部、硬式庭球部、ソフトボール部、バドミントン部、相撲部、四半的弓道部、空手部の一四部である。

社会体育施設の開放については、四十九年度から小、中学校及び高校の開放事業を行ない、体育館を地域に開放している。

ナイター施設は五十一年度の運動公園を始めとして、大隅北中学校（五十四年度）、月野小学校と大隅南小学校（五十五年度）、恒吉小学校（五十六年度）、運動公園テニスコート（五十七年度）、笠木小学校（五十八年度）、菅牟田小学校（六十一年度）となっている。

社会体育課は平成元年三月で廃止され、社会教育課に統合された。

第十節　芸術・文化

映画館

昭和二十二年十一月、終戦後の混とんたる世情の中で蛇穴金之助によって映画館が開館された。場所は日之出

町の薩摩マツダの所にあった。その後永い間町民に親しまれてきたが、テレビの各家庭への普及や愛好者層の若者が離郷していく現象の中で、志布志の竹中睦雄に映画館を売却した。

竹中も経営改善につとめたものの次第に経営がむずかしくなり、四十年一月二十九日、閉館した。映画館では閉館前の二十八日、二十九日の両日、お別れの映画館を開いた。

文化協会

同趣同好団体は従来からあったが、これを組織化して育成するため、昭和四十六年二月、大隅町文化協会が設立された。

末吉町に次いで郡内二番目に設立されたが、設立当初は短歌会、俳句会、美術同好会、フォトクラブ、混声合唱団、一輪会、吟詠会、伝統美術会、民謡グループ、万年青会、書道会で組織された。各グループの代表者が集まり、協会長等の役員を決め運営している。

発表会は弥五郎どん祭の三日間に展示や発表会を行う他、曽於地区芸術祭に出品する。町や校区の行事に発表会を持つこともある。六十三年度末、一三部門あるが、部門によっては地区別にグループがあるので一九グループとなる。

向田三男

医者であった向田源次郎の三男である。源次郎は末吉の大沢津出身であるが、栄町で開業、後日之出町に移転したが、三男は栄町で生まれた。大正三年五月二十二日生、東京美術学校を卒業して満鉄に就職、終戦後帰郷して都城工業学校に就職、姫城中へ転勤など美術教師として勤務、四十八年退職した。

二科会に所属、六十二年までに二科展に一四回入選している。その後病を得ては休んだが、また制作に取りかかった。三男の兄の民夫は父の業を継いで医者となった。平成元年現在、日之出町在住。

向田直幹（なおき）

医師向田民夫の二男で、昭和十一年八月六日岩川に生まれる。慶応義塾大学文学部卒、三十七年フリー写真家となり翌三十八年渡仏、五十六年日本サイン・デザイン協会特別賞受賞、世界各国を廻り、ヨーロッパの看板を手始めに一三冊の写真集を出版している。

日本写真家協会会員、日本サイン・デザイン協会会員、平成元年現在、鎌倉に住む。

弥五郎太鼓

町おこしの一環として商工会で企画、五十七年開設した。メンバーは二十三名で商工会青年部が中心となり、青年団員や役場職員もこれに入る。

大太鼓一　中太鼓二　中太鼓の大一　小五があり、伊藤清広が指導した。

地下濠のバンド

八合原飛行場の付属施設であった地下発電室の地下濠が大田尾に残っている。

ここに電灯や飲料水用ポンプの設備をしてバンドの練習をしている。五十七年松山の平田悦大がリーダーで結成したがＭＪＭと名付けている。町内からのメンバーもいるが、毎週一回夜二時間程練習しているが将来地上へ出たいというのが夢という。